續史籍集覽

番外雜書解題

三

69
50
5
東京圖書館
門 類 函 架 號 冊
六 九

番外雜書解題卷之七

戸田氏德 編輯

内閣文庫

文筆四

本朝高僧詩選二卷二冊刻　釋道穆

五山名ある僧の詩を集めし書ふり上巻榮西より疎石にいるた二十四人巻慧廣より文守まで六十六人元祿六年癸酉僧性澈高泉序及自序あり

堤通應高泉の意を請て采集するところといへり

南浦文集三卷三冊刻　釋玄昌

上巻文三十五篇中巻詩六十篇多く小序を附せり下巻を戯言とす詩文凡廿七題一時發興にして笑資とふすべきもの辨闘問答嘲龜壽等の類ふり就中無一の詩のごときその宏才を見るにたる寛永六年己巳無名氏の跋あり慶安二年己丑中野道伴刻

艸山集二十卷首一卷續集十卷十五冊刻　釋日政

本集は自撰にして續集八門人の手にいつ首巻寛文三年癸卯妙心寺太嶽序同二年壬寅明人陳元贇序自の題辭同九年己酉某氏通憲かしるせる行狀目錄あり統体周興嗣か千字文にて巻をわかつ　天之巻　叙　地之巻玄之巻　書　黄之巻宇之巻　記　宙之巻　傳　洪之巻　行狀墓誌　荒之巻　銘　日之巻　銘箴讃頌　月之巻　佛事　盈之巻昃之巻　雜著　辰之巻　賦　宿之巻　詩五言古　列之巻　七言古張之巻　五言律　寒之巻　七言律　來之巻　五言絶　暑之巻　七言絶　往之巻　雜體○續集　秋之巻より藏之巻にいたるまて四巻ともに詩閏之巻より呂之巻まて六巻文この續集体をわかたす輯錄す延寶二年上木

卿山集續三巻一冊寫　同

是則前につくもの此三巻閏餘成を以て號とするをみれは續集第五六七巻にして殘缺なる事しるへし

谷口山詩集六巻六冊刻　同

前の卿山集のうちより諸体の詩のみをぬき出せしものふり谷口の詩に曰谷口霞谷南主山自作客茗粥水半升竹廬第三人云々其集に名つくる處しるへし

山月集二巻一冊刻　釋　元鶴

貞享二年乙丑僧蓮か序あり長短篇五七律七絶諸体に過す巻尾詩一首なのせて跋に加ふ又蓮か作る所ふるべし編集は僧道肇か手に成れり

蓮浦集三巻三冊刻　釋　寂本

元祿八年乙亥泉涌寺前住湛慧序同七年甲戌の自序及僧中宜跋あり第一巻第二巻詩第三巻文同九年上木

野山卿集一巻一冊刻　釋　慈山

慈山か詩稿ふり元祿十二年己卯釋慧洞か序ありいふ僧虛空かつて妙立和尚の爲に行業記を作てその德をあらはすその文中妙立か詩稿にあるよ

しをいへり後年採集してその稿本を得て上梓すといへり

風水稿四巻四冊刻　釋　智好

元禄十三年庚辰自序ありみつからの詩体を分て輯録す

歸藏采逸集六巻三冊刻　釋　交易

元禄十三年庚辰僧道白号山序及性巽か跋あり又巻首に總目をかゝく交易か詩文を僧知圓かあつめし處ふり附録に黄門光圀卿及其藩板垣矩綱宗侍醫港中村顧言稱新八郎清三折ふゞ交易の贈答ありし詩をのす又巻末圓性か撰するところ交易の行實をのす

五代和漢略集二巻二冊刻　釋　彦岑

本山中興興山法印其嗣勢譽法印其嗣應昌法印其嗣立詮法印其嗣雲堂法印に至るまて五代の間相繼て僧徳尤高く道學密行の譽有といふ是その私歌詩文をあつめ載たり寛永八年辛卯即正徳元年僧雪峯大雄美序及同七年庚寅自跋あり

唐翁詩集四巻續集一巻五冊刻　釋　唐翁

享保二十年乙卯伊藤長胤序及享保十九年甲辰僧天産續集の序並僧義禪か跋あり体載を分たすして輯録せし書ふり

江陵集四巻一冊刻　釋　原資

寛保元年辛酉服元喬序祖徠跋及ひ南郭贈馬石書等をのす巻尾に南郭長篇一首をのす詩及五百三十四首体を分たすして輯録せり元喬序にいふ原資か詩釋門無二と稱す蓋數千首あり一旦自分火を取てこれをやく其後稍々録する所是を遺篋に得て梓に上すといふ

西溟餘稿三巻三冊刻　釋　元皓

延享四年丁卯岡白駒序あり文集にして各體に分ち記せり

僧察詩偈一巻一冊刻　同

延享元年僧淨雙寶壽院後住の序ありいふ本集を松浦と名つくその全稿中に就て絶句のみを輯録して梓刻すといふ同年無隱か序あり

僧察文集二巻二刻 同

延享元年甲子の自序及摠目あり元時自分の文をあつめたり

昨非集二巻二刻 釋 大典

權中納言菅原家長寶暦十年庚辰序同十一年辛卯五瀨淨王か跋 上

巻 古五律 下巻 七律 排律 絶

小雲樓詠物詩二巻二刻 同

天明七年丁未初秋釋慈周か序及ひ總目あり本集の中より詠物の詩を抄錄して部類を分ちたる書ふり

北禪遺草八巻四刻 同

首巻より第三巻まで詩雜體 第四巻序 第五巻記 第六巻觀墓碑銘 第七巻跋書牘 第八巻東山紀行江戸より京に歸るの紀行ふり末藁餘と題し序三篇を附す

北禪詩草六巻六刻 同

門人天爵かはかりて上木せしもの寛政五年癸丑釋慈周か序あり詩體を分たす

寶茶翁偈一巻一刻 釋 遊外

僧無住か編する所翁か集ふり巻首翁の像をあらはす自題する所五律一首あり僧敬雄か題辭及竺常あらはす翁か傳をのす巻尾僧察題辭及附錄翁か用る所茶具の銘文をのす皆一時名家の名つくる所ふり寶暦十三年癸未五月遊子梅山跋あり

芙蓉釋篇五巻四刻 釋 萬祥

明和五年戊子源敏樹序同四年丁亥僧戒淵序あり第一巻より第三巻にいたる詩第四巻第五巻文

介石遺稿二巻二刻 釋 淨壽

濱元成か輯る所明和六年己丑竺常か序同五年戊子衍揖か跋あり上巻詩下巻文附錄淨壽か塔陰文をのす法弟悟心か撰するところなり

錢塘詩集二卷二冊刻　釋法蘭

釋大潮か評判服元喬か題辭寶暦四年甲戌江忠圃か序あり上巻古詩及律下巻律絶此編天明八年戊申京都火災の詩をのす然れは諸子か序文は此集纂輯以前に撰する所ふるへし

赤須詩集七卷四冊刻　釋孟火

巻端肖像を圖し小傳をのす是その自撰する所の傳ふるよし安永四年釋普門其尾に志るす明和二年乙酉僧玄衆妙序安永四年乙未僧樹法隍か序同年僧光無極か跋あり三僧みな赤須か門人にして此集を編纂せるもの

ふり古詩律絶各体各一巻に分つ

洲菴遺稿七卷七冊刻　釋太玄

安永四年乙未大澤寺僧千丈序同五年丙申玉泉寺主鏡堂か偈をのす巻尾同二年癸巳墨照か跋あり首巻より第三巻にいたるを内篇とす皆法務にかゝる文章をのす第四巻より巻尾に至るを外篇とす古今詩百七十首雜

文五十二篇をのす

豹隱集三卷三冊刻　釋東適

天明二年壬寅龍公美か序同年源康純か跋藤共建盛嶽宗津跋あり上巻分て二巻とす共に七律中巻分て三巻とす五律七絶下巻七絶

青山樵唱集初篇三卷二篇三卷三篇二卷八冊刻　釋耆山

天明六年丙午泉谷杜多恵頓序あり初篇律詩二篇古詩律詩三篇文及絶句巻首總目あり然れとも巻中の次第目録に叶はす

六如菴詩鈔六卷三冊刻　釋慈周

天明二年癸卯江邨綬序同年松延年序同年琴臺源長卿序安永九年庚子東龜年序同七年戊戌井純卿序天明二年東江源鱗跋あり六如の詩を琴臺輯録し東江校正せしよし通計六百五十一首体を分て集録す

六如菴詩鈔後編六卷三冊刻　同

詩凡七百四首体を分たす弟苗村子柔輯録す寛政八年丙辰村瀨之熙

序同九年丁巳子柔序同八年森岡廷障跋あり

六如菴詩鈔遺編三卷三冊刻　同

畑維楨橘州文政元年の序あり慈周か遺草をその弟苗村子柔か集錄し　に子柔沒するよりて維楨つゐて上木せしよし體を分たす雜錄す末に子柔か詩若干を附す○子柔名を當剛といふ近江の人子柔は字なり

金城餘稿三卷三冊刻　釋海雲

寛政十二年庚申服元立か序同年關世植及加定章か跋あり体を分たす輯錄せり海雲沒後洞水か纂する處ふり

南溪集二編五卷附錄二卷三冊刻　釋日綱

文化戊辰倉橋俊序同己巳馬杉主一序あり首卷より第四卷に至る詩第五卷文○附錄暘谷贈答詩馬杉主一南溪と贈答の詩なり主一字玄敬號伊藩菴小出矣の儒臣日綱主一多年贈答の詩みふ天明戊辰の災にかゝる今その餘を摘て卷をなすよしふり文化戊辰華屋五平か識せる小序あり下

卷當時日綱と親交せる人々の詩をのせ又南溪沒後追悼の詩あり卷尾岡崎元軌か跋をのせて日綱沒後集しものふり

朝鮮筆談集一卷一冊刻　石川丈山

寛永十三年丙子朝鮮使來聘のときその翌年正月聘使菊軒權敬との筆談なり正德元年上木

韓使手口錄一卷一冊寫

天和二年壬戌の秋朝鮮の聘使來るこのとき本願寺にて諸人の筆語みつからの筆話等を輯錄す日記やうに書ふしたる書にして日數二十日ほとの筆談なり自序あり　人見友元

和韓唱酬集七卷七冊刻

同し時三都の諸儒三使幷に從者と筆語及ひ唱酬の詩賦をあつむ卷首に人々の姓名字號をあけて目錄とふす凡三十九名其中鳳岡林子松下見林人見友元佐々木玄龍木下順菴木下寅亮等其魁ふるものふり

七家唱和集十卷七冊刻

正徳元年辛卯來聘の信使と唱和に及ひし詩文筆語等七種を書肆の合刻せしものふり巻首に七種の書名および巻數記者の名をかゝく○第一冊

班荆集二巻　木寅亮か唱和筆談ふり○第二冊　正徳和韓集二巻

高玄岱の唱和に及ひしもの○第三冊　支機閑談一巻　記者三宅輯明にして觀瀾集にもこもれり○第四冊　朝鮮客館詩文稿一巻　記者室鳩巣○第五冊　桑韓唱酬集一巻　源保庸○第六冊　桑韓唱和集一巻　平元成○第七冊　賓館編紵集二巻　祇園南海

韓客贈答別集一巻一冊寫　林鳳岡

同年十月韓使來聘のさき信篤信充信智および門生を卒ひて問答せし筆語詩賦を集む巻首朝鮮國の奉書および本朝の復書をのす巻末韓使の官職姓名を擧け中官百七十人下官二百七十四人合て四百九十七員を志るせり

雨東唱和後錄別錄附一巻一冊刻　村上溪南

同し時九月西本願寺にて溪南鍼術の事を問答せし筆語を集む別錄は當時諸子の贈答の詩文ふり末に韓使官職姓名をのす

桑韓醫譚二巻二冊刻　北尾春圃

同年朝鮮信使濃州大垣桃原山全昌寺に留宿のさき春圃西山氏某に請て朝鮮の醫官奇斗文（嘗白軒と號す）に會してその醫治藥品脉の理を辨究する所の筆語ふりまたこの筆語に就て春圃の三子その父と討論する所のものを附錄とす同三年癸巳上木す同二年壬辰七月男權（春倫と稱す）序岡行義の跋あり

搓客通筒集三巻三冊刻　釋祖緣

北村可昌か序あり又搓客通筒集姓名といふものあり同時韓使來聘のとき祖緣接伴して浪華に迎へ江戸に來り事畢て又浪華におくりいたるまての唱話筆語等を輯めし書ふり

問査畸賞三卷 三冊刻　秋本以正

同年朝鮮使來聘の時以正等かの三使ならひに諸從者と筆語及ひ唱酬の詩賦ふり卷首韓人と唱酬せし人々の字號鄉貫をあく凡五人山縣孝孺入江若水安藤東壁朝散太夫藤其香及以正ふりまた物徂徠の詩文をのす同年田中省序同二年壬辰吉有鄰服元喬跋あり

雞林唱和集十五卷 十五冊刻　小野士厚

同年辛卯の筆語詩文を集む東武京師浪華及ひ諸州國によつて序を分つ整宇林子を始とす第十五の卷を補遺とふすものふり

藍島鼓吹一卷 一冊刻　釋月心

享保四年己亥朝鮮使來聘の時士厚三使及ひ從者と唱和の詩賦ふり翌年庚子夏伊藤長胤及竹田定直か序卷尾に新增東國輿地勝覽の序同書載する處朝鮮八道の圖を附刻す是書肆柳枝軒か附する所のよし其尾に見ゆ

藍島鼓吹一卷

前と同物ふり

星槎答響集二卷 一冊刻　釋月心

同年六月韓使來聘して對州に着津す月心對馬守に隨從して賓館に會見すこれその贈答の詩賦文章を載す卷末雨森芳洲松浦霞沼か和韻の詩壹兩首を載す

雨關唱和集二卷 二冊刻

前編後編二卷とふす前編は同年仲秋韓使來聘のとき長門國赤間關にて長州の文學四人と贈答せし詩賦および筆語を載せたり後編一卷は同年歸路の次また長州文學の士二人防州竈門關および赤間關にて唱酬せし詩賦筆語ふり同五年庚子春伊藤長胤の序長州野人佐重潛跋あり

客館璀粲集蓬島遺珠二卷 一冊刻

客館璀粲集は同年九月十六日朝鮮使尾州名古屋に來着せし時藩士

木下希聲客館にて贈答せし筆語詩賦ふり後編は同年十月廿五日韓使歸府の日の贈答なり蓬島遺珠は同時に同しく藩士朝比奈文淵か兩度の贈答ふり翌年京師に上木す

桑韓唱和塤篪集十一巻 十一刻 一冊　瀬尾維賢

同年信使來聘のとき諸州騒客贈答の詩を集む巻首列朝韓使來聘考及己亥來聘人の名並總目を出す贈答せしものは尾見正藝より維賢にいたる三十九名應接の地によつて次第す其魁なるものは北尾春倫宇都宮三的等ふり第十巻は維賢か筆語別に自序を附す第十一巻を補遺となし又諸子に及ふ

橘先生仙槎筆譚一巻 一刻 一冊　今大路元勳

寛延元年戊辰朝鮮使來聘のときの筆語ふり同年八月望月三英序及ひ服部蕭跋あり巻末附錄ならひに附刻を載す

來庭集一巻 一寫 一冊　松崎惟時

同年信使と江戸において筆語および唱酬せし詩文をのせたり

和韓文會二巻 二刻 二冊　留守友信

同年韓客と贈答せし詩文なり門人岡田安敬か輯錄する所同年陽月安敬か序及ひ自らの緒言あり

和韓唱和錄二巻 二刻 二冊　村上秀範

同年韓使と人々の詩賦筆語せしものを秀範輯錄す凡十三人その中留守友信あり同年源子登序及秀範か述言又巻尾自題の七絶一首をのす

班荆問譚二巻 二刻 二冊　直海龍

また同年三使と交會の筆語及唱和の詩賦等をあつむ巻末韓國諺文及宇士新か倭漢用字式を附載す戊辰百拙か序同年九月屈正超序同年孟冬魯山か序同年九月芥煥か跋同年十月釋淨壽か後序あり

韓槎塤篪集東方項言附 二巻 二刻 二冊　合田惠

これも同しとき應年十九にして江戸の賓館に會して贈答せし詩文筆語等

なのす○東方頌言又慈か撰する所本邦古より蕃國を制するの事を叙し我文明治化の盛なるを頌揚せり

和韓筆談薫風編二卷二冊刻　山宮維深

これも同し時城東本願寺の客館に會し韓人朴敬行字仁則號矩軒李鳳煥字聖章號濟庵李命啓字子文號海皐の三子と問答の筆語を門人のあつめて上木するものふり卷末附錄は專ら唱酬贈答の詩をのす延享五年戊辰其門人上月典則の序あり時まさに盛夏の節にあたれるをもて薫風編と名付るよし見えたり

桑韓筆語醫問答二卷二冊刻　河村春恒

又同年東本願寺にて韓醫趙崇壽等に會して筆談せしもの同年福山春調序及渡得正か跋同年上木

桑韓鏘鏗錄三卷三冊刻

これも同年の夏浪華にて時の文人十三人かはる〳〵客館にて贈答せし詩賦筆談ふり卷首に十三人字號鄉貫を出す下卷は浪華の醫百田安宅字平

拾號全峰韓醫趙崇壽と談論ふりこの年十月曾有原序同年十一月衣笠親賢の跋あり

筆陣三場一卷一冊寫　澁井孝德

また同年の來聘と寶曆十四年甲申の來聘と二回ともに孝德韓客に接して贈答せし所の詩文および筆語をのすたゝし延享戊辰の筆語是を獻紵藻と題し自序あり寶曆甲申の筆語是を歌芝照乘と題す紀德民の跋を附す又甲申の信使歸るに及て品川に追餞し別をおしみ筆語するもの是を品川一燈と題す明和九年壬辰中井積善天明四年甲辰賴維完跋を附す此筆語三種を合せて筆陣三場と名つけしものふり

癸甲問槎二卷二冊刻　瀧長愷

寶曆十三年癸未信使長門赤間關に泊す聘禮畢て明年明和改元甲申又赤間關にやどる兩度の筆語をあつめのす長愷と共に唱酬する所艸場安世山根泰德等尚數人あり皆本藩の人ふり明和元年甲申山根清か序あ

り此本長門の國學明倫館に刻する處ふり

桑韓筆語一卷 一冊 刻　山田正珍

同十三年甲申春二月韓使來聘舊に依て東本願寺に館す是時正珍年十六にして韓客應接の員に充られ制述官良醫三書記武官伴倘小童等と筆語に及ふ凡蕃館にいたる事十二次といふ是その贈答の詩文筆語を集めたり稻垣長章村岡彭か序あり

松菴筆語一卷 一冊 寫　今井敏卿

同年甲申朝鮮使來聘のとき學士三書記と本願寺にての筆語ふり

問槎餘響二卷 二冊 刻　石川貞

この書も同年正月諸友九人と大坂にての筆語ふりこの本その徒伊藤維典守伯編錄して上木する所那波師曾序あり

和韓醫話二卷 一冊 刻　山口忠居

同年二月三日朝鮮醫官慕菴に本國の旅館に候して筆問する處及同年

四月廿九日再會の話を記す同年松平秀雲序同年門人松浦壽か序明和二年乙酉釋諦忍空華上人跋同元年自跋あり

講餘獨覽一卷 一冊 刻　南宮岳

是書も同年韓使と贈答の詩文を自ら輯錄せるものふり三浦言水谷申か輯校する所ふり同年井孝德序同紀德民跋あり

兩東鬪語二卷 二冊 刻

同年東都にて韓客と應接の筆語及詩賦にして上卷は官醫松本良菴の贈答下卷は横田準大の贈答なり卷首三使及諸從者の位官姓名字號等をかゝく同年冬江忠囿か序野呂實和か序あり

問佩集一卷 一冊 刻　久川資衡

同年資衡韓客と唱酬する所の詩にしてその門人の輯錄する處ふり同年菅原綱忠序及菅原輝長か跋あり

東渡筆談一卷 一冊 刻　釋因靜

又同年二月十六日韓客應接の筆語なり松崎惟時劉維翰の序あり巻尾朝鮮元玄川因静か詩文軸後に題する文一篇なのす

伊藤仲導

蘭齋遺稿一巻 一冊 刻

門人藤周平輯む巻端題して初篇附錄といふ文川萬龜か跋あり此本たゝ韓人との贈答にかゝるものなのす

古賀精里

精里全書 對禮餘藻一冊 寫

文化八年辛未對州客館にして精里朝鮮使と贈答せし詩文なり

安東守約

霞池省菴手簡一巻附錄一巻 二冊 刻

霞池八明の張斐か號ふり斐字非文別號は客星元の名八宗升字遠公山陰の人ふり霞池朱舜水同郷の人ふるを以て長崎に來訪す省菴かつて舜水に徳あるを以てその所以について往復數度に及へりゆゑに贈答の詩文數多ありしをあつめたる書ふり又男守直の文なのす正徳四年甲午春伊藤長胤の序及ひ守約か序孫守經か跋等あり○附錄一巻又守約及ひ守直の遺文

をあつめたり是守經か附する所ふり

秋峯

桑華詩篇二巻 二冊 刻

秋峯源子本朝外考を撰する次本朝の文人異域にわたりて唐宋元明の人々と唱和せし詩を集めしものなりもとより彼土の書にあらはれしものを輯錄す貞享二年の自叙あり同年上木

同

異稱錦繡段二巻 一冊 刻

前と同物ふり書坊の姦に出て名を別にせしものふり貞享の自叙を寶永にあらたむ最惡むへし

妙壽院惺窩

文章達徳錄六巻 六冊 刻

此書は凡作文の体列格式を四書六經及性理諸書より拾綴して門目部類をわかちまゝ自考を錯綜し學者のためにその要旨を示らしむ萬暦己亥慶長四年三月朝鮮國刑部員外郎菁川羌沆の叙及寛永十六年己卯九月儒學教授兼醫官法眼杏庵堀正意の叙なのせたり詞達而已矣有徳者必有

言といふにとりて書の名とせしよし

國花集一卷 一冊刻

花艶谷選寛永五年刊本にして詩作の料にまうけたる書ふり部類蕪雜殆分つへからす熟字平仄故事作例等略類聚せり

句雙紙二卷 二冊刻

僧徒の輯るなるへし序跋なけれは年代の徴すへきふけれと寛永の比の刊本ふるへし一字より八言にいたるまて熟字對語を摘集すみふ作文の用にみつるものふり禪語尤多し

文筆問答鈔三卷 三冊刻　　釋印融

詩文述作の要領を志めす漢字にて記せり平仄の置かた用字助語のつかひやう及詩文作例等をあらはす上卷詩中卷碑銘等下卷表白願文序賦等の事を記す延寶九年辛酉上木

文家小筌二卷 二冊刻　　宇都宮三近

天明七年丁未孟秋力之光か再刻の序あり經書歷史醫書等を讀の大意音注助字の心得和讀點例音韻反切詩作の要訣點抹の例等すへて初學の先務とすへきことを志るせるよし書皮に紀せり卷末林修遠か補遺を附錄す此書元錄八年乙亥上刻舊題して學要といふ天明七年修遠再刻するに及て改て文家小筌とふすと云々

北山紀聞六卷 六冊刻

第一卷詩教　第二卷詩話　第三卷詩抄　第四卷詩格　第五卷詩摘　第六卷詩評　以上六種總稱して北山紀聞と標題す元祿辛未仲冬朔旦卯木翁氷胡子源鼎の序同年季冬讀耕林子の跋あり又六種或ハ序及ひ目錄等あるものあり氷胡子か序にいふはしめ梅關餘芳一卷あり淝陽の鷗波みつから記し自ら序して弟道全に授るもの即ち今傳ふる所の北山詩教是なり又霜月詩話二卷翠鈎主人子幹のみつから錄して攝江の子默これに序せり時に偶乾卷を存してその坤卷を失するもの尚し其他脫落散

佚文義をふさゝるもの間夥し後來漸く補綴收拾して一書となす即ち今の北山詩話これなり余またさきの兩書を借て是を誦る所その烏馬帝虎の差紛々として甚看過に苦り今傳ふる所と大同小異なり詩抄一冊杜詩の鈔解するもの委曲丁寧ふり其つくる所のよしを志らす事ハ各卷の首に見へたり今贊せす詩格詩摘の二書ハ橘正岑是に序してその據を述ふ此書はしめて羣体詩格老杜詩摘と號す後呼て今の名とふす詩評の卷を併て北山紀聞と號し或ハ四明六書と稱す惜哉或ハ脫簡しあるひハ寫誤して其全きものを得すその緒由を正さす然れとも此書を觀て其ことを辨し己の意に愜ふものを取て己と相違ふものを捨れハ則何そかの眞僞を論して其口吻を勞せんや翁すでに地下に入て修文とふり鷗波翠筠今ハすふはち亡しと云々

文法授幼鈔 六卷 六冊 刻

元祿乙亥二月義端の序にいふ此書何人の撰にやたしかふらすたまたま友人の許に得なるこれを閲するにその書たる大率先輩文を論するの要語を節取し幼學文辭を屬するの法式を揭示しその通曉し易からんかため間々國字もて是を記す老婆親切にして碎瑣を辭せす文を學ふの捷徑といふへし其ついに紛失せん事を恐れ淨寫して剞劂氏に付すと云々又凡例に云此書本凡例を立す今姑作者の意を逆へ編集の次第を錄して凡例とす又およそ中華諸賢文章の格言群書の中に雜出するもの予が管見の及ふところ其切要の語を採摭して本書の首めにのす此書作者を志らすといへとも要するに近代の撰にあらし蓋らくハ中古博洽多識にして文に長したる人の所論ふらん觀者ゆるかせにすることふかれと云々

文家必用 二卷 二冊 刻

人見直養

正德五年乙未武井方教か序同年自序及凡例六則あり助語の文字をあつめ以呂波を以て分類し字ことに經傳の古語ふと引て詳にその義を志るす

詩學逢原二巻 二冊 刻　　祇園瑞

寶暦十二年壬午冬釋敬雄か序及ひ同十三年癸未田徳卿か跋あり片假名にて詩つくるべき心得を志るす又詩話のたくひなり南海詩法の中又この書を収む

南海詩訣一巻 一冊 刻　　同

亦詩作の心得を片假名もてつくりたり先李嶠か詩を畢て起承轉合の理をさとし次に雅俗の辨古詩を覺ゆる事吟咏古風近体同異を辨するにおはる天明七年丁未江村綬序同年孫長幹序合離序あり巻尾同年彼慮道か跋をのせ詩法中また是書をおさむ

南海詩法二巻 一冊 寫　　同

南海詩訣一巻詩學逢原二巻題詠捷吟一巻文場腐談一巻是を合せて二巻となし題して南海詩法といふいつれも詩つくるべき心得を志るす

古今矩附文變一巻 一冊 刻　　荻生徂徠

宇佐美惠明和元年序あり李攀龍か文をあげ傍に評解を注して章段の轉法を論し古文辭を修する妙を述附文變これハ門人宇佐美惠か記す處揚士奇か贈醫士陳名道序の文を九變に書分て其法を示したるものふり

文罪二巻 三冊 寫　　同

徂徠かれて書生のために設くる三戒の事を志るせし書ふり三戒ハ第一戒和字第二戒和句第三戒和習にしてすへて和讀和習の往々文章の語勢を失ひやすく顛倒錯置の憂少からさる事を辨し伊藤仁齋か語を引て證とす

南郭先生文筌小言一巻 一冊 刻　　服元喬

門人烏石源君嶽跋あり云南郭先生の門時々助語の法を問ふものあり先生のちいへらくいやしくも文章に染指するにあらされハその味また知るへからすまた頗るその對をわつらはすをもて遂に數條を筆して以て諺言に代ふ且世に盧氏の助語辭あるを以て並せてその辨におよぶと云々享保甲寅上木

詩律兆十一巻六冊刻　中井積善

初學詩を作るの要を記したる書にして先平側排比の法を圖にあらはしその調律をもて恒變の二体をわかち係るに古人の詩句をもつてしその異同取舍を明にすまた巻末餘考附錄等をあらはし雜書及諸家の詩話を引據しまゝ私考をあらはすものあり寶暦八年戊寅三月の自序及凡例十六則あり

また寛永五年丙申仲冬門人中村有則の跋あり同年上木　小宮山昌世

發蒙書柬式二巻三冊刻

この書ハ尺牘書柬の式法をあつめ圖し尊卑親疎の等らり慶吊稱呼の差ある事を辨知せしむ及冊封の長短官職姓名字號の書法等すへて明の制に忘たかふ凡例に簡牘の寸法ハ舜水談綺を本とす書式ハ時用雲箋折梅箋を以て本とするよしをいふ寶暦五年乙亥常藩越克敏序あり同年上木　釋顧常

尺牘語式三巻三冊刻

書牘往復の熟語連字尊卑長幼稱呼の差等を辨識す下の一巻は書札識

封表書の定式を忘るす標して尺牘寫式といふ共に自序及ひ明和己丑六年

釋淨復跋をのせたり

日本詩史五巻三冊刻　江村綬

上古より當時に至るまての詩人をあけて詩作の工拙を論せり明和七年庚寅柚木太玄序及自らの凡例及明和八年辛卯弟絢か跋あり第五巻詩人の名をあけ鄉里を以て是を類別す凡例に此編ハ詩を論して以て人に及ふ人を傳へて以て詩におよふにあらすといへり　第一巻公卿の文學を論す上白鳳年中より慶長におはる　第二巻初巻の緒余にして武家醫家隱者釋氏閨秀等のともからを論す　第三巻元和己後京師の藝文を論し兼て他國に及ふ　第四巻東都を主として忘るす　第五巻第三第四の緒論なり

詩學新論三巻一冊刻　原直

東岳の詩話ふり明和九年壬辰七月江村綬序同辛卯冬久恒雍跋あり

藝苑錄二巻一冊刻　勝元鳳

初學の詩を作る爲にせし書ふり風雅頌時代に從ひ異るところ及樂府歌行分題等の法をさる古事孔詩の具とふるへきものふと片假字にて忘るす明和七年庚寅丹邱芥煥序阿波源規序原紀跋あり

詩型三巻一冊寫　　岡　徳　瑜

詩型と標すれと巻中いつれも詩學初問と題す詩學初心の爲に著す書ふり

詩輯六巻六冊刻　　三　浦　晋

天明四年甲辰龍公美の序同改元辛丑喬惟嶽の序同五年乙巳藤世衡か跋および總目をあくすへて十門に分つ和漢古今およそ詩にあつかる所の事ことくに載せて論説せる書なり

垂絲海棠詩纂二巻一冊刻　　村瀬之熙

安永八年己亥の自序あり詩人の櫻を詠するたすけに作れる書ふり唐山にて垂絲海棠を詠する詩文若干をあつめ初に總攷詩話綵剪等の門目を分ちて忘るすもと垂絲海棠の櫻に似たるを以てこれをもて本朝の櫻花を詠する作例にあつへきかためふり

楓樹詩纂二巻一冊刻　　同

また總攷詩話綵剪等の門を分ちて唐山の詩を載せたる前と同しけたし本朝花紅葉とふらひ賞するを以て其故事作例を異邦に求めて二部の書とふせしと見ゆ

麗藻八巻四冊刻　　由　良　儀

安永三年甲申自序を按するに明の鄧百拙嘗て鍥注捷錄を著し三才の事故を羅列して詩文述作の助けとふすその原本次序錯雜印板また磨滅するを以て儀その徒邊周劉蟠等に命して區別訂正して再校すといへとも憚る所あるを以て名を麗藻とあらたむその名ハ文選麗藻奇能の語にとるといへり書体天文地理等の目を立ておのつから事故をつらねたる文章各一篇あり凡四巻その文章中字句の典故出所を引て注文を作る又四巻あり合

て八巻八音を以て篇の次第とふすまた相合奏して功をなすの儀にとるこいへり例言七則目次及ひ鄧士龍か舊序萬曆癸卯鄧志謨即百か拙か舊序を附す
今改正する處の部類また繁蕪枚舉に暇あらす安永七年戊戌上木

歳華詩料二巻一冊刻　河村藤

歳旦より除夜に至るまての故事を集む詩作の材料とす一巻八西土一巻八
本邦の事を載岡田挺之序及安永九年庚子益根か父秀根か稗巷序同八年
己亥奥世文松永國華等の跋あり

文法披雲三巻　三谷撲

寛政十年戊午春那賀山元孝か序海保皐鶴か序寛政九年丁巳春伊藤
祐昌か跋ありおよひ凡例三則總目等をのすこの書八撲か師青陵か口授を
筆記したるものにてすへて文法にあつかりし事を志るせりまた巻首に青陵か
撰するところ不娶同姓論譴鼠文二篇をのせて附録とふす

文房秘鑰一巻一冊寫

助字及ひ詩文その外初學の心得にふるへきことを志るしたる書ふり句讀句
畫門初學須知門の二篇に分つ

筑川隨筆一巻一冊寫　藤章

巻端に筑川先生話凡十條と題す本朝の人おほくハ唐土の音に通するあた
はさるをもて鴻儒宿學の士といへとも文章の顛倒すくふからすして其意味
の病ひを論辨せり　章姓ハ藤原字曼卿信濃の人この書その師筑川といへ
る人のものかたりを筆記せしものふり

真訣鈔一巻一冊寫

文章の作法およひ助字のつかひよふ等を片假名にて志るせり

番外雜書解題卷之八

戸田氏德編輯
馬場信武

諸藝

初學天文指南五卷五冊刻

此書八師傳に得るものと古說とを折衷し天文學の事を解り璿璣玉衡の論をはしめ日月星辰の運行行道の事より風雨霜露の事にいたるまて假字にて記す寶永三年三月東關退士孤山居士と志るせる序を載す

新蘆面命三卷二冊寫

保井算哲の門人某か元祿甲申三月七日京を發し江戸に來りしより四月二日まての日記ふりされと天文にあつかりし事のみを多く志るす○卷首に云此書八天文家保井春海門人某の日記ふり可惜その名を志るさす京師の人故卷中皇都を尊信の意味多し且關東の事八傳聞の違ひも少ふからす然とも奇說多しよむ人察知すへし云々

二儀略說二卷 寫一冊　小林義信

一名を一輪論といふ自序目錄および多節齋大江意敬か正德五年乙未の奥書ありあまねく天文にあつかりし事を圖說したる書にして全篇片假名もて志るせり

天學指要四卷 刻四冊　西村遠里

天文學の要旨を假名に志るせるものにして初學の入易き書ふり安永五年加藩之士本保以守 字子鎮 序あり

頒行曆釋一卷 寫一冊　森蘭澤

享和元年辛酉岡林維祺か漢字の序ありこの書八年々伊勢より出るところの假名曆を坊間梓行の曆指南のごとく逐一諸書を引證してその解を志るしたる書なり

本朝統曆十二卷 刻十二冊　安藤有益

唐の徐昂か長慶年間に撰する所の宣明曆の體にふらひて神武天皇元年辛酉より靈元天皇貞享元年甲子にいたるまて凡百十三世二千三百四十四年間を考へ志るす其間年月日の支干月の大小閏餘および朔望日月の蝕常氣節中土用氣盈朔虛減没日にいたるまて是をつらぬ寛文八年戊申鷲峯林子序貞享四年丁卯整宇林子跋及同年の自跋あり 此本活字版ふり

六國史曆考六卷 寫一冊　同

國史中の年月をあけてその支干大小晦朔を賦注すこの書六卷一冊ごふせども錯簡して第二卷をもて第六卷の次に出せり

舊事本紀曆考一卷 寫一冊　同

神武天皇より推古天皇にいたる凡三十四世千二百八十八年の間年月日支干閏月大小を配し且その間年月の闕るものあるハ是を增補し誤れるもの是を改正して後來覽者の參考に備ふるよし元祿十年丁丑の自跋に見ゆ

日本水土考一 巻附 兩域人數考一 巻 刻一冊　　西川忠英

日本水土考北極出地より大塊の中に在所の方位および本邦の上國たるよし讃美して漢文もて志るせり巻首本邦方位圖及亞細亞大洲圖を出す

元祿庚辰七月自序あり

兩域人數考初に人數測法をあけ日本唐土全地數を舉その古今增法の術數をあく巻尾に穀田測一條を附す並に漢字もて志るせり○安齋隨筆に云此西川か說天地陰陽自然の勢に隨て水土の異を明にし生民の性を詳かにせり誣るにあらす他の腐儒水土の考ふく漫に倭俗と稱して賤しめ侮るものと同日の論にあらすといへり

長曆二 巻 刻二冊　　釋眞說

巻中題して簠簋內傳金烏玉兎集長曆萬善萬惡巻といふ四季土用操様の事善惡日の操様よりすへて曆日永代無窮不易の術を考へ志るせり上巻の末にいふ右此日撰之書從往古至而今流布於月氏晨旦日域明矣雖明文廣言繁而人無究其蘊奥故不能明辨年月日時之吉凶禍福皆混雜蒙昧而不知其要用矣予間竊閱於十一部之書以拔萃之而名以長曆後世至于萬々歲有何窮と下巻八星宿の事行軍日取の事等を志るす寛永十一年甲戌編するところなり

古曆一 鋪 寫一軸

天正十年の曆にして其体七耀曆也ま、虫はみふと文字漫滅して閲しかたき處あり巻尾に天正九年十一月一日と志るせるを見れは恐らくハ當時のものふるも知るへからすいつれめつらしきもの也

古曆一 巻 刻一冊

天文元年壬辰より元和三年丁巳に至る凡八十六年間の曆にして其體裁本紙一葉を四節に畫して四年を分記す年ごとに月の大小節中を志るしまた八卦の象をも配置せり

增續古曆便覽一 巻 刻一冊　　中西如環

安永六年丁酉序凡例あり舊刻古暦便覽慶長丙申より安永にいたるまれど後年往々差謬ありかつ中根元圭か推算の年限已に盡るをもて今貞享甲子より筆を起し安永丁酉より以下十有餘年を加へしよし序凡例に見ゆ舊板の便覽と体例同し月の大小節氣支干日月食八卦等を載たり

新井白石

律尺考驗 二巻 二冊 寫

すへて律尺の考を片假名にて志るせり巻首にいふ余嘗て古尺を考定めけるにその證驗とする所のものあまたあり一には漢の古錢二には唐の開元錢三には類宮禮樂疏の尺式四には朝鮮五禮儀の尺式五には明の朱之瑜か尺この五種は華韓より渡り來て今の世にあるものあり六には御府の竹周尺七には尚衣局の裁尺八には上宮太子の古尺九には生鉤寺律衣の尺十には通行の工匠尺この五種は本朝に傳來の古物なりその從來を尋るにまた皆西土より流布したるものと見えたり今一々にその說を志るすと云々

同

三器攷略 一巻 一冊 寫

尺度解量權重三器の考を志るしたる書にして巻末田藉路程の二攷を附錄せり全篇漢字もて記す此書或は巻尾に舜水談綺載するところの尺式を附するもの有といへり

中村惕齋

三器通考六巻 二冊 寫

度量衡の三器を歷代制度の書に考へ合せ漢文につゝれる書ふり年號不記の自序及引あり

遠藤元理

重訂度量衡考一巻 一冊 寫

西土度量權三器の考ふり考文みふ片假字もて書せり又本邦古今度量のたかひ等を志るす巻尾寶永五年戊子春正月書寫二月上浣校閲恕庵子洞甫と志るす此書すなはち松岡玄達が手寫するところ乾坤一醫儒怡顔齋圖書等の印あり

源九龍

權重標準一巻 一冊 寫

醫藥調劑のためにせし書ふり巻首にいふ本邦の度量衡四方一揆治を施

すに於て妨ふしさいへども只醫藥を和合するに至てハ方劑の分量古今の準
折を志らすんハ不可ふり云々○梁の陶弘景か本草序錄の文宗の禹錫か嘉
祐補注に引ところ唐本艸の蘇恭か言等を例として一格を低して私案を
加ふ

度量衡說統六卷三冊刻　最上常矩

漢土度量衡三器の沿革を考て當今に配當し凡て古書をひろく蒐羅し
て自說を附せる漢字の記ふり文化元年山本信有及總目便覽目同年桂
川國瑞の跋あり第一卷度尺にかゝる第二卷第三卷斗量にかゝる第四卷
權衡第五卷第六卷三器を總論せるもの六卷の末藥品の分量を志るすこ
れ常矩殊に意を用ひ自調劑して效驗をみる所なるよしを記す國瑞法眼の
跋にもその考究の密ふるを賛美せり

町見書一卷一冊寫

卷首に凡例八則および振矩目錄をかゝくまた卷末に奥書ありこの書ハ一

切町間の見樣および町見の術にあつかりし算法等を集めたる書にして書
中往々繪圖をあらはせるもの有奥書右一卷佐州山方役丸田金左衛門よ
り恩借寫之享保五年庚子七月上原太内と志るす

聚分韻畧四卷四冊刻　釋虎關

上平下平三十韻を記して略その詩句故事を摘舉し併せて諸籍の出所を
載す虛乾時氣支態座食器光數復等十二門を立て字を類聚す今世に行
るゝ處の三重韻ハ此書の母字を提出したるものにして又錄か撰なり此書
後二條院嘉元四年著す所ふり○白石退私錄曰虎關の三重韻ハ十二門
に分ちしか虎關の作ふり本ハ三韻通考て朝鮮本にありしみつからの義本
にも侍るめり世に唐本の三重韻といひしといふ事をわらふことにいたく侍り
ぬれど朝鮮本には侍りぬこの給ふ○老人夜話云大内介ハ西國一の大名ふ
りし周防の山口の城に居る大内家藏板の聚分韻略あり義隆家刻の跋あ
り其本今稀に存す○昆陽漫錄青木敦書に云三重韻に虎關の序あれども虎關

の時ハ聚分韻畧と名つけて韻を三段に重錄す天野氏の藏する所の古板の聚分韻略を見れハ十二門を立て五卷とふし虎關自筆の序寧一山自筆の跋あり同人の藏る享祿庚寅の年刊する聚分韻略三重韻のごとく韻を重ねて踈に作者宿園肇者秀篤とあり是簡便にとりて宿園はしめて聚分韻略の韻を三段に重ねたるによりて作者宿園と記したると見えたり同人の藏る朝鮮本の韻略と云一冊の書を見れハ三重韻の如く韻を重ねて十二門を立す宿園韻略によりて聚分韻畧の韻を重ねたりと見えたり云々

字彙莊嶽音十二卷二冊刻　釋文雄

反切を詳に記し字音の謬を正し十二支をもて十二集に分ちし書ふりけたし莊岳の字孟子に出つ世に字音を誤り唱ふるもの多くして正音に化しかたき尚楚人の齊語に化しかたきがごとしもし此書に就て正音を學はゝ莊岳の間に身を處して齊語を學ふの易きに類せるのよしに取れりと寛延三年庚子石州三浦衛興序同年長門山縣子祺序及寛延元年戊辰文雄か自分の凡例なり

經史莊岳音一卷一冊刻　袖珍　同

寶曆四年甲戌龍公美序および凡例九則ありまた經史諸書の字音を正したる書なり卷末通論および點發字を附錄す

三音正譌二卷二冊刻　同

上卷ハ吳音漢音華音の三音を論し下卷ハ韻鏡第一轉より第四十三轉までをこと〳〵く吳漢華の三音に分ち并したる書ふり下卷卷首に凡例六則をかゝく

九弄辨一卷一冊刻　同

李唐の沙門神珙か九弄反紐の事を辨したる書にして字音反切を知るに益ある書ふり

古今括韻開合圖一卷一冊寫　同

韻鏡洪武正韻五音集韻古今韻會の四書括韻開合の異同を一圖にあら

はせし書にして人をして弁し易からしむ巻末寛延刻韻選序例總目を附載す是又蹊か撰する處ふり僧郭（巻中に云伏城郭公是なり）ふるもの韵學のみたれたるを憾て訂正韻選を刻す蹊是か爲に撰する所の序一篇凡例十五則四聲配属摠目のみをあく寛延元年戊辰秋八月こあり

音韻啓蒙一巻（一冊刻）

四聲清濁輕重の事五十音排列の事世界萬國同音の事ふこすへて音韻のことを假字に解せる書なり文化十二年乙亥四月鵬齋龜田興序あり

太田方

漢吳音圖三巻（三冊刻）

文化十二年乙亥五月の自序あり反切圖　漢吳音徴　漢音圖說と三にわかつ韻鏡に漢吳音及ひ轉音を國字にて志るし反切のまきれ易きを正し拗音を眞字に作り漢吳音に原音次音あるをいふ蓋反切に於て功ある書ふり

倭玉篇三巻（三冊刻）

慶長十五年庚戌二月京師に刻すひたすら音訓を片假字もて解す毎巻の首に偏冠字例の目次を掲くこいへとも其體格の採用する所他の字書と大に同しからす

貝原好古

和爾雅八巻（七冊刻）

天文地理歳時居處神祇人倫身體親戚官職姓名衣服寶貨器用獸鳥魚蟲飲食果蓏菜蔬草木數量言語雜類の二十二門に分ち古來より字に無書をあやまるもの訓を誤るもの等を正し漢土の書をも多く引て考を志るす本邦流傳の俗字諸書に雜見すといへとも古書據ふきものハ削て載せすといふ此書童蒙の爲に訓詁を專とするを以て爾雅と名つくるよし元祿二年己巳五月竹洞野節序同七年甲戌五月貝原篤信序同十年戊辰十月松下見林跋あり

新井白石

東雅二十巻（十冊寫）

書體源順か和名抄にふらへり凡天文歳時地輿神祇人倫宮室器用飲食

穀蔬果蔬草卉樹竹禽鳥畜獸鱗介蟲象にいたるまて古言今言方言等を諸書に考へ出るすすへて和名の原を考え又朝鮮語蠻語梵語等の相交りて和言になりたるをも悉考究す是君美貶黜の日深川の別業に有て撰する所也色に引用書等大方審定を得す牴牾重複勿論なりといへりとハしくハ新安手簡にその事みえたり又その宏才をみるへし享保四年乙亥夏四月室直清序あり我東邦ハ萬國の先に居り聲氣の元をひらき文字を待たすして能言語の變を盡しいかにもその言いやしからす故に東方雅言の意に取て東雅と名つくる由見へたり○新安手簡に君美安澹泊にこの書の序を乞れし由見へたりと今の本にハ是ふし

以呂波註解一巻一冊刻

貞享二年乙丑八月自序云傳言以呂波者三人之所作也色香散者勤操之所作也其後從杵築明神有夢想秘歌二首而我世誰常乃至不醉者弘法之所作也竟置京字傳教之所添也と又巻起に舊傳以呂波因

釋元暉

涅槃經四句偈作之者也色香散者諸行無常也我世誰常者是生滅法也有爲奥山今日超者生滅滅已也淺夢不見不醉者寂滅爲樂也と出るせりすへて漢字にて假字四十八の意義を注釋せし書ふり

和訓栞二十八巻刻二十四冊

谷川士清

巻首本居宣長の序および凡例大綱ありもはら古語雅語の注釋にて和訓の原つけるところを考へ正字を以て訓詁とふす○凡例に云我朝のいにしへハ語を宗とし字を假とすされハ日本紀古事記萬葉集など文字ハさま〳〵に書たるその中にまた意義をこめたるもありよて此書も假名をもて標出し正字をもて訓詁とす云々又云此書五十音をもて次第し後のいうえを省きぬれハ四十七條を立たり各條の下もまた五十音の序てによれり捜覧に便あらしめんがためふり云々又云この書假字つかひを本として訓義を解す假字つかひ差ひぬれハ訓義もまた從つて謬るかつ訓義を曉して假字のわいためも味ふへし又假字づかひハ古事記日本紀萬葉集倭名鈔新撰字鏡等の古書に

本つきて後世一家の私論を據とせず訓義さはきハ右の古書ふさに見えたるハもとより論なしその注釋の書又もはら和語を解し書さも皆得失あり今その得たるを取用ひたるも多くハ書名をあらハさず煩しきをいとひてなりその餘ハ見聞のうる所固陋を忘れて臆斷せるものふし云々文化二年刻する所保の宇に至て止む

和漢字名錄四巻 一刻 一冊　藤井常枝

天明六年丙午花朝龍公美の序及ひ凡例八則あり巻ごとに目錄をかゝく簿稽に云ごの書ハ韻書によつて音訓の假名つかひを正し且和歌のてにはの助け字休め字延へ假字促め假名讀曲せ轉聲稱呼の相通漢音吳音の別ち叶叶の評說假名反切の諸例をのせ附錄に韵鏡諸抄の是非を論す

字義和訓考一巻 一刻 一冊　横田維章

民生日用の字義を字彙および諸書に考へ五十韻の反切をもて字訓の稱呼をわかつ一韻ごとに乾坤人倫言語衣食器財氣類草木の七類に分てり文化八年辛未八月の自序あり

助字考一巻 一寫 一冊　伊藤長胤

巻首助語義と題し也矣焉乎等若干の助字に字書および諸書の中よりその字義を解したるを抄錄し一格を低くしてその私考を附す次に助字考證と題し巻首に出せし所の助字に一字或ハ二字三字連續して助語をふすものを諸書の中よりあつめ擧たりその證據詳なり

廣益助辭三巻 序目凡例 一巻合四巻 六刻 一冊　三好似山

此書盧允武か助語辭に本つき一千有餘を增益し每字經傳を引證しまた梅誕生か字彙をもて切音を附しその余若干の韵書によつて其訓詁を考へ志るせり元祿五年壬申の自序及ひ凡例あり

宇海便覽七巻 七刻 一冊　岡島援之

享保十年乙巳秋八月那波兎毛か序あり朱子語類四書五經中の文字辨に入るべきものハ國字をもつて譯す

用字格辨正三巻四冊 寫　井狩總

寶暦十年庚辰の自序あり伊藤長胤か作れる用字格にて文字のおきかたを解たる書の誤を正したる書ふり

助語辨法四巻四冊 刻　津敏

文化六年己巳天沼爵序同五年自序附言總目ありもろ〳〵の書より文例を引き助語の差別あることを辨したる書ふり○津敏字ハ子恵櫻崖と號す攝津の人

世事通考一巻一冊 寫

五十九門に分ちて二字三字連續せし熟字をあつめ略その音義等を注す巻端に新刻巖鎮原板世事通考とあれハひとたび上木せしものと見へたり

雜事一巻一冊 寫

この書も二十五門に分ちて連續せし熟字をあつめ和訓を其下に志るしたる書ふり

舞樂小錄一巻一冊 寫

この書ハ舞樂諸曲の次第を志るしたる書にしてその体裁儀注の体にならひ左右舞節ハ音の順次をつまひらかに志るせり巻末右條々依内々被仰下注進之正和二年四月頼成と志るし次に又大炊御門前大納言入道與尊し正二位行權大納言太宰權帥藤原朝臣と志るし花押あり

樂曲考一巻一冊 寫　從三位權中納言宗武卿

明和五年戊子十一月宗武卿の序あり唐樂の中皇帝破陣樂を論したる書にて此樂ハ唐の太宗の作り給ひしとも又玄宗の作り給ひしともいひてたしかならす其名も武德太平樂ともいへり唐にさる名聞す杜祐か通典を見るに破陣樂てふ曲三つあり一ハ立部伎にありそハ秦王破陣樂七德舞ふとゝもいひて百二十人甲を着戟をさりていくさたちを學ひ舞ふふれハ吾朝にさる曲ハ傳はらす一ハ座部伎の中にありそは小破陣樂となんいふ舞人四人金甲冑さあれハ吾朝に傳えし秦王破陣樂ハ是を誤りよぶふりけり又讌樂の中に

破陣樂ありこハ舞人四人緋綾袍袴を着て舞ことあり是ハ吾朝に傳へし皇帝破陣樂ふりける玄宗の御作りと謂へるも小破陣樂に誤れるふるへし又かの讌樂ハ唐の貞觀年中に作られしふりなと見えたり

樂律考一巻 寫一冊　　荻生茂卿

樂律考の次に樂制篇を合せ載すこもに聲調及ひ制度の考を志るす寛保三年癸亥九月念二日春臺太宰純謄寫の奥書あり次に太宰純かあらはせし律呂通考を附錄す

樂說紀聞二巻 寫一冊　　松田健

享保八年癸卯三月林士禧の序總目あり享保六年辛丑季冬健君命をうけて樂部の諸書を抄出して是を呈し名つけて樂記紀聞といふ己か意を附せすして樂家者流に咨詢しもつて疑を決し誤を訂すこ林子の序に見えたり巻中又譜を載す目跋に樂器圖一帖あるよしみえたれとこゝにハ欠たり

樂說紀聞二巻 寫二冊　　同

同しきものにして冊數のみたかへり

音樂紀聞一巻 寫一冊　　貝原篤信

音樂にあつかりし事聞見にまかせて書集む樂器の類ハ往々圖にあらはす

樂器衣冠圖一巻 寫一冊

和琴琵琶箏琴笙笛高麗笛篳篥神樂笛等樂器の圖および瓔珞玉佩綬禮服大袖同小袖裳天子御玉冠攝政玉冠天子御禮服攝政禮服等衣冠の圖を志るす衣冠の圖ハ往々燕脂を施すものあり

樂數目錄一巻 寫一冊

すへて樂の名を本調子枝調子凡十門にわかち志るし及ひ高麗樂をも別に調子もて分ち志るせる書ふり

三禮口訣五巻 刻五冊　　貝原篤信

飲食茶事書禮の三禮を童蒙の見易きか爲に假字にて志るす○第一巻飲食の部本膳に向ひし時の法より日々の食禮を舉元祿十二年己卯自序

あり○第二巻　茶事の部また自序あり○第三巻より第五巻まで書禮の部又自序あり巻末茨木方道が元祿己卯の跋をのす

坐鋪疊鋪様一巻一冊寫

吉禮凶禮のとき坐敷の廣狹によりて疊の數さまをのべ圖にあらはしたる書ふり禮家の祝を集めしものと見ゆ

本朝名公墨寶三巻三冊刻

嵯峨天皇以下八幡山惺々翁にいたるまてすべて十七人の墨蹟ふりこれ本朝法帖を印刻するのはしめふり巻末正保三年無名氏の自跋にいふ本朝いにしへより未勒珉刻木の帖ある事を見す是其人に乏しきにあらす好事の者すくふきふり一日或人このことをもて予にもとむ予知る所の家藏を假借し目力を極究し臨摸鐫刻するもの若干人若干帖あるひハ行草あるひハ假字惟帙をふすに急にして廣蒐博采の遺憾ふきことを得す然れとも墨寶の嗜好淳化の遺意ふり云々

能書事蹟四巻四冊寫

穂積保

入木の故實書家の履歴をひろく國史諸記録より考へて其說を集む此書僧侶の筆跡ハ世に稱するものあれとも是らす鑒定家にて賞する筆跡といへとも傳記に所見ふきハ記さゝるよし凡例に見ゆ○保ハ越後の人此本保か師森尹祥校正す尹祥ハ東都人ふり巻首尹祥か序巻末源弘賢跋あり

心畫執範一巻一冊刻

貝原篤信

書論書法書評の三條に分ち諸の書を引て書道を論す正徳壬辰上木

新撰類聚往來三巻三冊刻

釋丹峯

正月より十二月まて四季往來の書翰をつらねその際民生通用の字を類聚して童蒙の助ことせし書ふり慶安元年上木

日用集一巻一冊寫

國家通用の書案ならひに文辭等のあらましを記す○巻尾に云右一冊者久保吉左衛門尉正元以傳授之旨當務所用之趣一帙綴之而號日用集

努々不可出閫外者也延寶二申寅歳三月朔日

市川三亥

木菴墨談三巻 三冊刻

書法を論せし書ふり唐朝より明朝まで墨跡を刻する匠名其外文房に關る事におよへり文化九年壬申佐藤坦序同年池桐孫序あり

鳥羽希聰

和漢研譜三巻 三冊刻

和漢の古研をあつめ圖にあらはし一面ごとに寸尺石色等をこまかに志るせり余氏研林高茅二氏研譜を附載せしよし寛政七年孟春の自叙にいへり天明丁未十一月柴邦彦及源元凱序あり

狩野永納

本朝畫傳五巻 五冊刻

舊記小説より畫家の傳を集録す凡四百餘人皆漢字もて記せりけだし其友黒川道祐贊成の功ありといふ延寶六年戊午鷲峯林子の序あり○第一巻畫原畫官畫所畫考畫運畫式畫題を并す○第二巻上古畫録○第三巻中古名品○第四巻專門家族○第五巻雜傳補遺附録附録ハ畫器畫具を并す自跋及延寶四年道祐跋元祿四年上木

柴屋軒宗長

雨夜記一巻 一冊寫

宗長としころ宗祇に連歌附句等さま〳〵の體ある事をとひ尋ねしを雨夜のたひに書つゝりて宗祇の一閲を乞たる書ふるよし永正十六年己卯五月の自跋に見ゆ

瓶花巻集附瓶話一巻 一冊刻

弟太田元貞編する處山本信有か序天明五年己巳山中宣及同年元貞か序巻尾東方望後序あり本集各体雜集す瓶話ハ命貞曾て挿花を愛すかつて作る處其術凡俗にかゝはらす茶家者流にかゝはらす一家の法を立總論

榎田命貞

瓶花巻集附瓶話一巻 一冊刻

弟太田元貞編する處山本信有か序天明五年己巳山中宣及同年元貞か序巻尾東方望後序あり本集各体雜集す瓶話ハ命貞曾て挿花を愛すかつて作る處其術凡俗にかゝはらす茶家者流にかゝはらす一家の法を立總論

及花體挿法品評宜瓶養貯結社席飾翫賞箴戒等に分ち記せり瓶話の義
詩話酒話等の目にふらふといへり

玩貨名物記 一卷 一冊 刻

萬治三年四月の自序に往年小堀遠州平素見聞に達するところの名貨みつからこれを志るせり余幸ひに其寫本を得て是を閲するに實に本邦數多の名貨を志るす然れども傳寫の誤り或ひハ名貨いまだ嘗て載せざるものあり故に四方の道に達するものに訪問してこれを考正し脫するものハ是を補入し名つけて玩貨名物記とふすと云々茶事の古器吉物を類聚し逐一その持主の姓名をのせたり又卷首に相阿彌か御飾書を載す

大枝流芳

青灣茶話 二卷 二冊 刻

寶曆六年丙子三月浪華巢庵主人の都賀庭鐘序あり煎茶家一切の事を志るし漢土の書にみゆるものを考へ合せ器物等にいたるまてあらはしたる書ふり

茶窗問話 三卷 四冊 刻

近松茂矩

享和三年癸亥藤原俊篤序および源敬忠跋あり茶道のもの語を集錄す序に云尾藩近松氏茶道の故事をあつめ上王公より下もつて逸民に至るまて茶道有德の君子をあけ是にくはふるに畫圖をもつてし三卷とふし名つけて茶窗問話と云と云々上卷分つて二冊となせり

名人碁傳 二卷 二冊 寫

石井恕信記す所寶曆十二年午五月の奥書に本因坊道知かもとに幼より有て聞たるもの語を集錄せしよし載す本因坊算砂算悅道悅道策道知知泊九代纂元まて其外門人等の傳をかゝく

解紛記 四卷 四冊 活刻

古刀銘盡慶長十二年活刻墨卷と書表に志るす錄卷の末にも其年代をしらす自序に古刀の事夫々述作するありて其說まちまちはし今其紛を解きこの書を志るせしよし見やすへて古刀の見定めやう作家の見ところ等をく

わしく述たるものふり

刀劍武用論一巻　　稲葉通龍

鍛工川部儀八郎正秀の書翰を井上清章か輯る處ふりすへて刀劍の類ハ鍛錬の佳惡にかゝはりたる事を論す文化九年壬申清章序同八年辛未武廣安英か跋あり

鮫皮精義二巻二冊刻　　野田敬明

浪華の人淺尾遠視なるものかつて鮫皮精鑑錄をあらはす通龍更に編次をあらためて家に刻し名付て鮫皮精義といふすへて刀劍の柄鞘に用ゆる所の鮫皮の品等を辨しその細工製方等にいたるまてを問々圖畫にあらはしたる書ふり天明五年乙巳八月上木

金工鑑定秘訣二巻二冊刻　　野田敬明

文政三年庚辰物維則守君一序同年菅原長根按するにこれ本阿彌光悦七世なり序ありすへて後藤彫刻の秘傳見ところをくわしく圖說せし書なり

正續花押藪十四巻十四冊刻　　丸山可澄

正編七巻元祿三年庚子六月の自序及凡例七則及總目あり上天子より下達歌師にいたるまてあまねく古人の花押をあつめたる書にして官位もて分ち年代を以て次第せり○第一巻天子親王執柄大臣○第二巻大中納言參議二位三位○第三巻四位○第五巻五位○第六巻無官位○第七巻釋家連歌師

續篇七巻寶永五年戊子九月の自序及總目あり體裁正篇に同し○第一巻天子親王執柄大臣大中納言參議二位三位○第二巻四位○第三巻第四巻第五巻並五位○第六巻士庶○第七巻釋家連歌師寶永八年辛卯上木　此書正編八可澄密に義公の命を奉して撰する處續篇八義公薨後公の遺意に遵て編成する處なり續篇の序にいふ花押藪成るの時江帥匡房の花押有てその證を得ず愛を鶏肋に割くことあたはす志はらく是を收む後延久二年官符を得るに及て江帥及小槻師經連署の牒ふりこゝ

に於て疑惑氷釋しまた前篇かく處三蹟の一小野道風の押字を得て並に是を收むといへり可澄また自ら以て精識の感する處とす實に史館遺愛の忠臣ふりその續篇の成功義公在世の日に迫はさる事可憾の甚しきふり

松崎祐之

古押譜六卷七冊刻

正德五年乙未の自序に元老源紀伊州牧君視事之暇好古不輟在京日使祐之歷觀四方搜古圖籍云々よつて京師中古祠舊刹に收むる所の古書古券等に載る處の花押をあつめ氏を以て是を分ちその姓名官銜譜系年序等を考へ記す第一卷分て上下とふす上卷天子親王源氏下卷源氏第二卷平氏第三卷藤原氏第四卷橘氏より多々良氏にいたる廿一姓第五卷諸氏第六卷雜纂釋氏又各氏の下曆號官署有て家稱を考得さるもの附收す正德六年丙申上木

檜山義愼

華押譜七卷第三第四第六第七卷闕

此書ハ丸山可澄か撰せる正續花押藪及ひ松崎祐之龜山侯藩臣の撰せる古譜等に遺脫せしものを拾摭しその體ハ則三書に倣ふといへり帝王大臣公卿山林遺逸方外緇流等おのゝ〳〵其位階生卒の年時等を志るせり第一卷天子女院親王法親王第二卷源氏第三卷平氏欠第四卷藤原氏欠第五卷諸氏第六卷釋門欠第七卷歌人書畫家欠 文化十三年丙子成島司直の序及十二年乙亥臘月の自述凡例をかゝく

藤貞幹

歷代外印鑄造考一卷一冊寫

本邦古代の外印鑄造の年時を考へ記す印章の員後附を併せて凡十二あり大寶制令の時鑄る所のもの一天平寶字初年に鑄る所のもの天平寶字二年に鑄るもの一同八年官號を復するの日に鑄るもの一弘和のはしめ鑄るもの一弘仁以來用ゐる所の印一應和中鑄るもの一康平中鑄るもの一承久貞應間鑄るもの一延元曆應間製する所の本印一なのせたり

後附に弘安九年十一月八日度牒に歇する所印一正和二年四月八日度牒にのする所印一をあらはす此書寛政六年に成る所ふり卷の最尾に貞

幹按貞應以來有所用外印而弘安九年十一月正和二年四月度牒所用外印如右始知當時用度牒者別有印矣さとるせり

君臺官印 一卷 一冊 刻

東山義政の便殿を君臺觀と名つく同朋相阿彌尤茶事にくはしきを以て餝付以下の事を命せらる卽相阿彌預り奉りて其事を執行す此本觀中藏する所の名書畫の落課のみを集めたるものにして又相阿彌か手にふれるものふるへし○新安手簡に云君臺官印ハ東山殿のとき相阿彌か能阿彌か畫印をあつめ候ものと御聞及是も御紙面にて初て承知仕候相阿彌ハ能畫さ相見野拙若き時小納戸役仕候時分數寄屋道具共兼預り當家の俗稱にて唐物奉行と申候其節取扱候て覺申候云々 安潛泊

印章備考三卷 三冊 寫

榊原 玄輔

卷首に引用書目及ひ總目あり諸の書を引て一切印章にあつかりし事を志るしたる書ふり

後漢金印圖章一卷 一冊 刻

田 敬之

天明四年甲辰二月筑前國那珂郡志賀島の田間より堀出せし倭奴國王と志るしたる漢印の事を志るす 金印論 金印鈕考 金印答客難の三篇に分ちて此事を錄せり村瀨之熙か藝苑日涉にこの事頗る悉せし合せ見るへし同年關禎序同五年乙巳自序あり

官私印章鈕式一卷 一冊 寫

同

印鈕說 八則および印石の圖五十五顆を載す卷首例言あり

官印譜一卷 一冊 寫

すへて官印四十二顆を摹寫せし書ふり附錄又四顆を載す末の二顆その一ハ鷹司關白輔平公所彫用長者印貞信公家牒に用られたるもの摹刻せられたると見へたりと志るし其一ハ伊勢國紀州領の中にて地中より堀出す紀州郡奉行井田龜之助所持と志るせり

樂燒秘囊二卷 二冊 刻

中田 潛龍

すへて陶家の術を志るす凡土を製し形を鎔するの事より各品貼彩の樂法に至るまて三十七條を載せたり附錄食物貯樣薫物の製法を志るす享保十八年癸丑冬至日東々主人と志るせる序あり

番外雜書解題卷之八 終

番外雜書解題卷之九

戸田氏德編輯

宮崎安貞

百家

農業全書十卷六冊刻

元祿十年丁丑十月廿一日佐々宗淳か尺牘同九年丙子貝原篤信か序同年假名の自序貝原好古か後序及ひ凡例十則總目農事圖等あり　第一卷農事總論○第二卷五穀類○第三卷第四卷菜○第五卷山野菜○第六卷三草○第七卷四木○第八卷果木○第九卷諸木○第十卷生類養法○第十一卷附錄每卷目錄をかゝく凡て百穀菜果の類種藝の時節糞養の法を假字にてしるし每物圖をあらはす篤信かつて此書をあらはすに志ありいまだ稿を脫するにおよはす安貞ここに農事に委しきを以てこの書を撰し是を樂軒にはかる樂軒かの稿本を刪補してこの書ふれりさよつて篤信か稿を以て附錄とふして是を十一卷となすといへり樂軒ハ篤信の兄名ハ日

休といふ

農術鑑正記二巻 二冊 刻

砂川野水

此書民間農夫の心得稼穡播種の事より年中の行事を一々記して漏す事ふし享保八年癸卯三月自序に先祖より鄉にぬて農民の吏司たる事百年に余りぬれハ生付たる耕作に百姓の助力有事を心附常々農書を校閲年々近國に往來し老農の稼穡を見習ひ作り覺し草藁を聚む草木菌菜藥種等を五穀とひとしく民の産業に利有もの子か管見を賤山かつの爲に記すと云々同年無盡堂普雄なるもの序及跋あり跋に此書載する處歳時記農業全書に遺こるをひろひあつむるよしをいふ

農家實行二巻 二冊 刻

簑豐昌

此書ハ豐昌相模國の郡令たりしとき著す所にしてあまねく相中の農民に須行せしむるものといふその趣意實に小人學道則易使のことはりに出て凡妄愚の民をして孝悌の道を喻り敦厚の俗に移らしむる事より農事を勤

勵し須臾も怠惰すべからさる事を假字に志るして略その向ふ所を知らしむ鳴鳳卿の序及元文元年丙辰贊規瑕の跋あり鳳卿の序によるに此書を撰するの舉ハもと武州川崎邑亭長馬老史明の請需る所也と史明の志また厚しといふへし

四民格致重寶記一巻 一冊 刻

神尾包

すへて民を救ひ農務を重する意を記し子孫の爲に遺せしを男忠厚寶暦三年癸酉はしめて上木す享保七年辛寅十月池谷正光か序同年自跋寶暦三年林信言の刻序同年忠厚か跋

民間備荒錄二巻 二冊 刻

建部由正

飢饉凶歳の手當を志るしたる書にして巻首に流民之圖枕藉於道路之圖設粥廠施粥糜之圖發儲蓄倉賑恤飢民之圖をあらはす自序にいふ今茲寶暦五年乙亥霖雨破稼米粟不登農夫菜色あり予これを見るに忍ひすみつからオの拙きをはからす民間備荒の術を錄し邑長保正にあたへてか

の天恩を報んと欲するのみ寶暦五年乙亥孟冬日と志るす同十年庚辰二月橘壽園序同七年丁丑源成朝序同六年丙子茂逸群序同乙亥の自序同庚辰三月井戸玄豎か跋伊藤惟則の跋明和八年辛卯曽根希方か跋および凡例目錄あり

農具地方古持籠二巻一冊 刻　飯塚生清

農民四季の事業を志るしまた農務のさまを圖にあらはせり自序に農業の事頗る廣大ふる故に書落事も數多かちん春の目より壤の溢れ落を子穢れし手に拾ひ集め古持籠と題すと巻末四延享五年辰初春飯塚生清述之とあり

田園類說一巻 寫一冊　谷本教

凡村方有用の雜事を三十條に分ち志るしたる書にして廣く古今の史籍を引てみつからの考を附せり寛延年中撰する由巻尾に見へたり

田畑定法一巻 寫一冊

地方の事にあつかりし人の手に出る書留ふり田畑坪割の事物成上り高の事土地の肥瘠播種の宜惡の事また檢見巡見のときの誓紙文例を志るす

田地正利之覺一巻 寫一冊　牧野某

田畑の高割年貢賦税等の事を志るす民を治るの道におぬて心得とふるへきの書なり

農稼業事五巻 刻五冊　兒島如水

兒島德重如水孫　校正田畑の耕しかたなと自試て善ふるものをゑらみしよしすへて五穀諸草ともに雌雄のたねありこれらの見分け肝要ふることを述寛政五年自序あり文政紀元浪華に上木

督農要略一巻 寫一冊　菅谷某

文化二年乙丑源誠美の序ありいふ寛政中菅谷氏野州吹上に宰たるのとき親からその民に臨み耳目の及ふ所凡督農に功あるもの手つから是を錄して家に秘すと此書は一切税歛にあつかりし事を志るしたる書ふり

新民須知一巻 一冊 寫

漢文ふり田賦租税の事耕作の節氣ふさしるす巻末に地方の事を記せる書十三部をかゝけて撰人を注す

四公六民集一巻 一冊 寫

田畑の坪割撥見の心得等を記す地方を志らべる人の用にたつ書物ふり　大藏永常

農家益五巻 五冊 刻

享和二年壬戌奥野秀辰序同年新井公廉序及ひ自序あり農民の黄櫨(はじ)を植て其子を採り或ハ黄蠟を製して利を得ることをしるすされど畿内關東の民其術を知らぬをもて其製方をくはしく志るして民に益あらしむるよし云々

農家益三巻 三冊 刻　同

前と同し　同

農家益後篇三巻 三冊 刻　同

文化七年庚午荒井公廉序同年藤堂良道序あり前編にもれたることを補ふこれも前の五巻のうちにはこもれり

琉閩百方一巻 一冊 寫　同

巻端農家益三編と題す琉球閩の作りかた同しく延織様の事くはしく志るす圖畫をも加へたり

農業勵行辨一巻 一冊 刻　中川真業

農業を勤め怠惰をいましめ農時を奪ふましき心得を記せり寛政七年乙卯仲春の自序同年高井伴寛序及門人湯淺道究の跋あり

農家調寶記一巻 一冊 刻　高井伴寛

農家必用の雜事數十條を書あつむ文化六年己巳の自序及ひ巻首に目錄をかゝく

老農茶話一巻 一冊 刻

文化元年源但季の跋ありすへて農具の事四時農業の心得を志るせし書に

して益あるものゝ為り受和國主人逸とのみありて俗姓は志るさず

地方書一巻 寫一冊

地方の事にあつかりし事を雜記す本書および追加合せて百二十ヶ條あり本書の末慶安己丑初秋記之畢と志るし追加の末延享三丙寅年十月書之畢と志るす

地方錄一巻 寫一冊

また前と同種にて地方こゝろ得の事を雜記したる書なり

補民地方記一巻 寫一冊

この書も地方にあつかりし事を雜記す巻末國々上中下の歌など十餘首を載す巻尾に延寶八年庚申五月日記之畢と志るせり

地方取扱書無巻數 寫四冊

地方の事に練熟せる人の記と見へたり代官職の所務取捌の事もらさず志るす此書巻の叙なく一冊を所務仕置の部とし一冊を諸帳面幷大通見

分譯とし一冊を堤川除普請之部とし一冊を知行所御代官請取候節可心得品等覺と題せり

地方根元記 寫五冊

此書も前の取扱書抔の類にしてすへて郡令などの心得をそれ〳〵志るせしものなり

續地方落穗集十三巻 寫二冊

これも亦地方取捌のこと一切を志るせり御城米廻船の諸掟咎人御仕置等の事などさま〳〵の事を書載す目錄を按るに八巻に起り十三巻附錄におはるされハ首巻より七巻に至るまて脫せしと見へたりまた此書續とあれハ本編ありと知らる

地方必用無巻數 寫十一冊

これも前の書にひとしきものゝ為り巻の次第をわかたす所務仕置之部と題するもの一冊諸帳面幷大通見分譯と題するもの一冊村方請取節心得可」

申品々幷檢地之事と標するもの一冊立毛大通見分役神文下書追而可有增減也と題するもの一冊村々庄屋組頭連判手形案文可有之大概注之と標するもの一冊按針之法と題するもの一冊檢地に付諸事覺書と題するもの一冊扒伏替勘定仕上之覺と題するもの一冊堤川除之部と題するもの一冊物手代中より可申渡覺書可有之大概記之追而令了簡可加增減也と題するもの一冊題を標せずして直ちに書出せるもの一冊ともに年時等をも志るさず

地方細論集五卷五冊寫　　眞壁　某

寶曆九年己卯の自序あり此書檢地檢見の事より田畑の割付土地の肥瘠穀物上り高の事其餘法度號令の事にいたるまて凡民をひきゐるの術大率是を載たり間々諸書及漢土の制を引證しなのか考をも附せり

地方竹馬集四卷四冊寫

漢字の自序および奥書あり毎卷に目錄あり亦一切地方有用のことを類聚したる書ふり往々畫圖をあらはせり　　陰山　元質

田祿圖經三卷二冊刻

夏商周三代の際田を分ち祿を制する遺法を志るしたる書ふり孟子の書に本つき禮記王制に參考し本邦の法をもてらしかたはら其門人の嘗て問答せし語をのせ往々圖をあらはす元祿十三年庚辰春三月の自序

井田圖說三卷三冊刻　　齋藤　高壽

明和四年丁亥二月十八日の自序あり又卷首に總目をかゝくこの書ハ鄉遂井田を圖解にあらはしたる書にして尤くはしき書ふり第三卷を附錄とふし日本鄉遂井田圖說を載す卷端また目錄をかゝく

井田衍義一卷同補五卷二冊寫　　上田　一道

この書も井田の法制を和解したる書なり題して井牧通行圖說といふ享和元年四月自序附言六則ありいふ近來井田和解といふもの有て專ら童蒙のために圖解を作る一道これにふらひて圖說を作る然共彼ハ鄭注孔疏

に因仍しこれハ直に遂人匠人之所言による故に相合さる事有へし摠論經文を標し漢文もて自說を施すといへども間々假字もて志るせるも有附錄又徵助之法是を今に施すへき事をいふ并古今租稅の法を引徵す

補田錄圖經上巻明二井地法一中巻明二錄地法一下巻分て三巻とふす上巻參主制中巻通本國法下巻答問全篇漢文にて記す巻首目錄あり

和漢分量辨惑一巻一冊寫

井田賦稅鄉遂都鄙及ひ錄雨斤鈞石のたくひをみふ圖說して人を志て見易からしむ

三輪希賢

養蠶後篇抜書一巻一冊寫

此書久しく坊間書肆に埋沒せしを越藩の士平勝睿取出して珍重せしよし即勝睿か抜あり記する所養蠶術のみに止らす巻首蠶を育し桑をとるの事凡三條を志るし次に救餓大意次に社倉略法次に社倉法大意を記す皆假名を以て簡易に志るし專ら蒼生をすくふに切なるの書ふり

養蠶秘書一巻一冊寫

塚田　某

蠶のやしふひ方を十九條にわかち志るす寶暦七年丁丑正月の自跋あり

樹桑一巻養蠶一巻絲絮一巻一冊寫

樹桑　巻端に桑仕立方と標しかたハらに桑植付度もの苗木替に候は申出へし仕方おく分遣はすへしと志るす

養蠶　かいこ養方と標しまた旁にかいこ試に養度ものハ八十八夜前に申出へし種つかはし候事と志るす

絲絮　いとわたことしらへ方と標す按するに三種ともに標題の下に五條御役所と注すにより是ハそれより出せし寫と見やまたいつれも三四枝に過ずその略方を志るしたるまてなり

造糖法一巻一冊寫

烏糖および白糖を制する法ならひに蔗を植る法等志るしたる書に志て巻首に享保十一年九月第六番厦門船主李大衡がいなせるまゝの書を載す次

に譯者游龍順内官梅三十郎清川永左衛門等か和解を附せり

砂糖製作記一巻 刻一冊　　木村喜之

砂糖の製法を記し且製造に用ゆる所の諸具等ことゝく圖にあらはす寛政九年丁巳八月の自序を按るに寶暦の頃紀伊に安田泰といへる人有和蘭陀の法を得砂糖を其國にて製し試るに暖地ふるによりて黒白の二品を作り出せる事胆齋にひとし終に上貢に供すされと故あつて其法を秘し他に傳へさるを寛政二年庚戌喜之新に台命を奉し紀州にいたり其法を傳聞しかつ書につゝりて世に弘むへし口授の秘も殘さす書顯すべきこの事にてはじめて成書の功成り上梓するよしないふ同年秋九月松本保門跋あり

蜜蜂記一巻 寫一冊　　久世敦行

凡蜂を養ひ蜜を製する術を類分ちて記せる書ふり寛政三年の自序あり

新撰紙鑑一巻 寫一冊　　木村青竹

巻中題して紙譜といふ享保十三年戊申のころ撰述する所ふり其後五十年

許をへて安永年間書肆増訂して上木するものと見へたり凡諸州に産出せる紙品をあつめ志るし一種ごとに紙性の粗緻黒白竪横の長短寸尺等を志るしたる書ふり

蕃藷考一巻 寫一冊　　青木敦書

この書八中華の史籍に蕃藷の事を載たるを抄錄してみつからの考を附しかつ薩州より奉る所の寫をものせたり巻末松岡成章か蕃藷錄及蕃藷考補を附載す蕃藷又蠻薯に作る一名甘藷和名琉球芋すなはち今俗に所謂薩摩芋ふるもの也享保廿年乙卯自序あり敦書少して民間に在り蕃藷八飢年第一の助なるを以て建議して享保十九年甲寅すなはち敦書に命して養生所の墻地にうゑしむ敦書又おもへらく今の流刑は罪人の天命を終ら志めんためなり然るに南方諸島食乏して飢人多しよつて乞ふてまた關東島々に是をうゑしむ是より島人糧食のうれひふしとみつからあらはせる昆陽漫錄に見へたり

飼籠鳥二十卷 二十冊 寫

文化五年戊辰自序あり多く和漢の書を引用して諸鳥の事をくはしく記したる書ふり自序によるに鳥の事ハ素より好て心を用る一朝一夕に非すかつ四方の國々を遍歷して遂にこの書を編す委くハ後編に記すよし凡鳥の事に於てハもらす事なき書ふり考索のみつふる書に就て志るべし

第一卷　自序總目　凡例　文義備考　引據書目異鳥○第二卷　飼法部　廿五條○第三卷　飼法部四十一條○第四卷　雞部十六種○第五卷　雉部十六種○第六卷　鳩鴿部二十種○第七卷　鸚鵡部二十七種○第八卷　山雀部二十種○第九卷　駒鶯部二十二種○第十卷　雀部三十種○第十一卷　諸雀部四十三種○第十二卷　黃鳥部二十三種○第十三卷　烏鵲部二十二種○第十四卷　候鳥部十四種○第十五卷　鴆鵂部四十二種○第十六卷　鵲部二十七種○第十七卷　鵝鴨部三十六種○第十八卷　鵜部二十七種○第十九卷　鷹部

一種○第二十卷　隼鵰部二十八種

蓄翎秘訣六卷 六冊 寫

凡て鳥けものを籠蓄養する術を志るせり○第一卷定餌狆兎○第二卷産巢○第三卷　藥法○第四卷　飼立○第五卷　定餌鶉○第六卷飼法早啼其獸類八种兎二種に止るのみ

仁義理古武志一卷 一冊 刻

卷首に目錄をかゝく四十八鷹の圖をあらはしおよび一切鷹にあつかりし雜事を頭書に志るしたる書ふり

花譜三卷 五冊 刻

貝原篤信

元祿七年自序並自跋あり中下を分て各二冊とす上卷總論栽栽接樹等の事を記す中下花卉草木十二月を以て次第をなす又草二十四種木三十三種雜草等凡三十六種を出すみな形容培養等を記せり考用書目六十一種をあく

櫻之辨一卷 寫一冊 附櫻譜櫻品　　山崎嘉

本朝にて花さしいへふさくらふる事より和漢の書及詩歌を引てつゝりたる一篇の記ふり○櫻譜　奈波道圓撰櫻の品類十五種をあげ及詩を附す漢字の記なり正保四年丁亥三月自序あり○櫻品　松岡玄達撰別に單行す巻尾に夫木の歌十六首をいだす名所の歌ふり附名所櫻南殿櫻より妙覺寺櫻にいたる以上當世名花のいふみふ因縁詩歌等をあげたり

櫻品一卷 刻一冊　　松岡成章

奈波道圓か櫻譜を補ひ彼岸櫻より不斷櫻まて六十九種を圖說したる書ふり後蘆田鈍永其考をかへて上木す鈍永か序玄達か享保の自序奈波道圓か正保四年丁亥の序寶暦丁丑男典か刻跋あり末に羅山林子山崎闇齋及鈍永か櫻の辨を附す

梅品二卷 刻一冊　　同

門人甲賀敬元今枝榮濟男松岡典仝校巻首漢字の總論一章を載す白梅の類廿九紅梅三十一種皆圖を載せ范至能か梅譜及古人の說等をあげ自己の考を附す末に西土の書中その名を載て名未識もの十二種梅の名有て品類にあらざるもの七種を出せり寶暦八年男典の跋あり

怡顔齋蘭品二卷 刻二冊　　同

正德二年壬辰五月靈元上皇の密旨を奉して撰る所なり上皇叡覽の後私に譯するに和文を以てし附るに圖繪を以てすといへり諸書を引て蘭の種類をつらねその形狀を辨し及自說を附する漢字の記なり巻尾蘭の圖三十品を出す此本成章歿後男典か校する所明和八年辛卯勝惟寅か再刻序及目錄延享三年丙寅門人奥田萬か跋より元刻享保十三年戊申此本明和九年壬辰再刻

怡顔齋竹品一卷 寫一冊　　同

體裁蘭品におふし竹の種類をあつめ其形狀功効等諸書を引證しまゝ達云と志るし國字もて自考を附せり享保二年丁酉の自序にいにしへより竹を

愛するものある事尚しこいへともたゝ其趣のみを志りてその種類の異同品標の雅俗を辨するものゝなきを遺憾とするの故ありて此書を編するよしを云へり

梅津　方昌

勝事考二巻 二冊 寫

享保元年濱野移水跋および序あり藤掛似水か草木圖編の後集を撰ひしにその功未た終らすして沒するよりて方昌その業をつき全書とゝのへしよし按るにこの書の跋移水か印章ある時ハこれその原本なるうたかひなし此移水ハ方昌の男敬義の師ふり

江村如圭

聚芳帶圖左編九巻 四冊 寫

享保十二年丁未八月自序及堀正脩石川正恒か序人見啓安か跋凡例六則をのせ凡百の草木圖をあらはしその形狀を漢字もて志るせり春夏秋冬四芳に分つ第一巻總括　第二巻己考品春芳　第三巻同夏芳　第四巻同秋芳　第五巻同冬芳　第六巻未考品春芳　第七巻同夏芳　第七巻同秋芳　第九巻同冬芳

草木養秘傳書一巻 一冊 寫

種々養ひて繼穂等の事を隨筆したる書ふり

艸花繪前集一巻 一冊 刻

染井の農夫伊兵衛撰する所元禄己卯小春の日自序あり草花百餘品を寫出し花の形狀ひらくへき時節等を畧記せり巻尾に作り様仕様ハ地錦抄といふ草紙に志るして前々出せりと志るす

牡丹鑑三巻 一冊 刻

牡丹の花譜ふり巻末に牡丹花壇土拵様および養ひかた等を志るす巻首に元禄二年己巳王春晩英軒の序あり

牡丹之書一巻 一冊 寫

巻端に題して牡丹私用懐中華壇といふ享保七年壬寅の自序自跋あり目序に金之と志るし自跋にハ觀證八十八歳書とあり共に印章一顆を押す印文を按するに觀證とあれハ其人の撰ふるべけれど通稱を志らすすへて牡

丹谷種培養の法をしるす凡四十五條

牡丹之書一巻 一冊 寫　　小野蘭山

京都文通牡丹手入之事と題し牡丹培養の事を記せり五六條に過す

耋筵小牘一巻 一冊 刻

自から八十の賀筵を開きし時著す所にして世の人の疑惑せる花草を考辨せり附錄に嘗てあらはせる花鑑に本づき花の名を詠せる狂歌二十一首及ひ友人敬齋か著せる花錦を併のす文化五年戊辰三月多紀元簡か序及自言をのせてまた孫職孝及門人井岡列か跋あり

紙上蜃氣一巻 一冊 刻　　溝口林卿

凡宮殿樓閣より民屋橋墻にいたるまて名目をあけて訓を施す凡二千三百餘錦あり匠家童蒙のその業をふらふもの其名を辨し其其術を施すの便せし書なり書の名紙上に宮殿樓閣造家の錦をあらはすは尚海上に蜃氣の樓臺あるかごとくふるにことなるよしふり寶暦八年戊寅自序あり寛政二年

庚戌上木

普請目論見明細書三巻 三冊 寫

土手石垣樋橋等すへて川々にあづかりし普請修復等の目論見積り方の次第を巨細にしるしおよひ畫圖をあらはせり

地方書一巻 一冊 寫

この書ハ普請目論見明細書と同書ふりたゝその標目を異にするのみ書寫ともに前書にハおとれり

捧心方八巻 一冊 刻　　中川某

奈須恒徳の跋によるに此書ハ後花園院寶徳三辛未歳中川某のあらはす所にして其後天文七年これか新増補遺をふすものあり志かるにまたその輯者の姓名を錄せす且第四第五の二巻殘缺せり恒徳かの古醫書の存せるもの數家に過すまたこの書の隱沒せん事を恐れ活字に改板して間々脫誤等の愚按を加ふるよしをいふ凡諸疾藥劑の方法をあつめ志るしたる書なり

○按するに蕉葮堂藏書の寫本にて寶德三年辛未氐月叟か漢字の序同年中川子自述の後序文明壬辰村庵靈彦の跋あり刻本にかきたるハ遺憾といふべし

見宜翁醫按一卷 刻一冊　　松下見林

赤松正溫見宜堂と號す初名道芥桂庵壽仙坊皆別號ふり蓋赤松則祐の孫醫をもて業とすこの書漢文にてその醫按をくさ〳〵志るしたるものふり門人見林天和癸亥の記ふり寶曆九年上木

丹水子二卷 刻二冊　　名古屋玄醫

嘗てみつからあらハせる所の隨筆中より醫家の事にあつかるもののみ抄出せし書にして古書および諸子の醫術を論したる確言等をのせたり貞享四年丁卯十一月風竹堂人と記せる序および自序あり

濟生寶五卷 刻一冊　　寺島尚順

享保七年壬寅春丹波頼庸の序及自序あり每卷に目錄をかゝく自序にいふ予是より先に和漢三才圖會若干卷をあらはしおほむね事物の大要を載す然れとも療病の粹にあつからす而も醫ハその業とする所是を洩す事自ら遺恨あり是において診脉病論先輩の定規をあつめ經驗の鍼灸および和漢單方にして即効あるものを撮み綴りて五卷となす是を匙函に藏し題して濟生寶といふたゝ自己の忽忘を助くるをもて寶と稱する而已と云々

醫家名數四卷 刻二冊　　草野益節

師村井玄竹の遺志を繼て撰するよし醫家有用の文字のかす字を冠するものをもろ〳〵の書より乾坤、人事、脉證、藥食、醫方の五門に抄錄せし書なり寛延庚午戸田齊序享保甲寅自序寛延庚午小野當安跋あり卷尾に名數附錄を載す

復古明試錄一卷 刻一冊　　稻葉巷水

上方清謙前田溫潤二子蜚水か醫術の口授を集めたる書なりみふ片假名にて志るす享和三年癸亥諸葛蠡序及ひ自序あり

叢桂偶記 二冊 刻　原昌克

寛政庚申藤田一正序同年大谷恭跋及男昌文跋あり醫道に係ることにおもひ出るまゝに雜記せし漢字の隨筆なり

醫事小言 六卷 七冊 刻　同

昌克か醫說を門人等か筆する處片假字にて志るす文化二年乙丑田村玄仙序及享和三年癸亥昌克序目錄あり第四卷を分て二冊とふす

牛山方考 三卷 三冊 刻　香月啓益

天明二年壬寅那波師曾序同元年辛丑松本愼序元祿己卯自序あり藥方をかゝけて其下に經驗を注す治療の事はくわしく志るせり

漫遊雜記 二卷 二冊 刻　永富鳳

是鳳か四方に周遊して醫事を雜記するもの自他藥療の驗非等を記す漢字の記ふり下卷の末配劑方を出す文化四年丁卯姪藤元幹刻序寛政九年丁巳弟小田泰序寶曆十三年癸未門人龜井魯序及明和元年の自跋

あり

醫語八鳳か卑見を以て子類に擬して作れる漢字の記ふり出處道術文武將法時藏等の篇目を分つ寶曆十二年壬午清田絢序文化五年戊辰姪松士藏跋あり此本元幹等か校訂して文化六年己巳再刻するところふり

天命辨々 一卷 一冊 刻　黑田玄鶴

文政改元岡村弯　序あり玄鶴試脉の餘死生は醫の知る所にあらす天命ふりといふ說を看破してあらはせし漢字の說なり

赤水論藪 三卷 一冊 刻　五島惠廸

寛政七年乙卯男增田必由序同年次子必賀序同四年自序あり第一卷書牘第二卷第三卷を尾子と名つく共に醫術にかゝれる漢文の論說ふり

療治茶談 自初篇至六篇 九冊 刻　田村玄仙

初篇一卷　明和七年庚寅山田尚繩序同年茂公序及賢田玄林序凡例等あり治療の事をこまかに志るし何の病には何の藥法にて經驗あることふ

ど志るす調合のめかた煎しかけんにいたるまでもらす事ふし己下皆同体なり
○後篇一巻　天明元年辛丑自序同年西美序同年佐久間亮水跋あり
○續編一巻　寛政十二年庚申三宅實之序同人附言同年佐野璋序同
年奥田侃跋あり○續編附錄一巻　寛政庚申中川昌房序同年寒川子
次跋あり○三編一巻　山本信有序天明四年甲辰東野松塡序巻末に
文三章あり○四編一巻　寛政三年辛亥深河蟠龍序同年山本信有序
ありこの巻疝の經驗を志るす末に文二章あり○四編附錄一巻　天明八
年戊申山本信有序秋木龍序同年自序自跋あり○五編一巻　寛政六
年甲寅遠山知則序あり專ら疝毒傷寒の治療を述○六編一巻　文化五
年戊辰西田尚綱序ありこの巻には中風の事を多く解り

難病治驗方二巻附錄一巻二刻冊　葵伯民

文政五年壬午寵天錫序同四年辛巳龍元瑞か跋伯民の題辭門人關衡
か凡例ありこの書ハ門人師伯民か經驗を得し難病の主劑を志るす毎條錄

せし門人の名をしるす

養精補缺集一巻一冊寫　橋本德

一切の病その治法を雜記す巻末種德齋ど志るす

病名俗解一巻一冊寫

病名の頭字を國字分にして病症を注解したる書なり巻首に宣春庵閱甫
箋浩菴校ど志るす

斷毒論二巻翻譯斷毒論一巻三冊刻

文化七年庚午石坂宗序哲同年山本信有序同八年辛未大田元貞序凡
例目錄あり德卓見を以て百病皆傳染による説をのべ痘痳痺疥の病源を
論し避之の術を志めす漢文の記ふり　翻譯斷毒論は其子力作か假字に
て筆授する所また凡例あり是本編のあらましを摘取して不文の者の用に
備ふるよしいへり德か著書省方類鑑金瘡口授醫治等ふり

醫家千字文注一巻一冊寫

周興之か千字文の体にならひ醫家有用の文字をあつめ四言の韻語をもて
ついてたる書にして一聯ごとに諸書を引て注解を下せり永仁元年の自序
ありこの書の撰者散位正五位下惟宗時俊といふ姓を詳にせず○巻末に
永仁元年十二月十日撰抄し同二年三月一日書寫畢時俊花押同四年
十一月十八日扶病校二千石尚康已ノ時俊受庭訓ノ文章生于時玄
輝門院侍中貞俊花押と志るせり

眼科新書五巻 五冊 刻　　杉田豫

この書もと和蘭人のあらはす所にして漢字もて是を譯せり眼科凡百十八
症をあつめことゝくその術を志るし巻首に凡例略説及豫か支解する處
眼球略圖並總目を出す文化十二年乙亥勒か序及同年大槻茂質の跋あ
り

金瘡秘傳集四巻 四冊 寫

序および目録あり金瘡治法の秘傳をあつめたる書ふり第二巻のすへ右此針

井流雖ノ爲ニ秘傳一無ノ據御執心之間相傳畢努々他傳有間敷者也細川
參河守高在明地十兵衛宛名越前櫻井新左衛門同圓藏坊越後成就
坊同蓮秀院關上彌五右衛門善方半七元和八年八月吉日書之畢と志
るし第三巻の末右金瘡五十九ヶ條江州北之郡山本之住人淺見道齋
秘傳書也天正六年菊月吉日と志るし第四巻の末小笠原大膳太夫長時
同右近太夫貞慶小池甚之丞貞成右此一冊當家別而雖ノ爲ニ御秘事一任ニ
御執心一懇記進ノ之候努々疎早不ノ可ニ他見一者也と志るせり

古今樞要集三巻 三冊 寫

一切金瘡秘傳の治法をあつめたる書ふり序あれと名氏ハふし

延壽撮要一巻 一冊 刻　　曲直瀨玄朔

玄朔關左に在るの日偏州下邑のもの養生の道を志らすして夭折のうれひ
有を愛憐し和漢古今の書より養生延壽の術とふるへき樞要の語をあつめ
延壽撮要と號せるよし慶安四年の後序に述言行飲食房事三篇にわかち

て心神を安し飲食を節し起居情慾おの〳〵其正しきを得て養生延壽ふらしむるよし簡約に書集たり

頤生輯要五巻 七冊刻　　貝原篤信

正徳元年辛卯自序に篤信諸書を閲することに保生延壽の論あれいこれを抄録し遂に數百條にいたる但方外術士の徒に出る虚妄の説はすてゝ採さるよし全編十二門に分ちすへて身を大切にし病に免かれしむるために作る書ふり同年竹田定直が跋あり同四年甲午八月京師に刻す

養生訓八巻 四冊刻　　同

人生衛保の要を假字もて記せり第一巻第二巻總論第三巻飲食第四巻飲食飲酒慎色欲第五巻五官二便洗浴第六巻慎病擇醫第七巻用藥第八巻養老鍼灸法正徳三年癸巳後序に八十四翁貝原篤信書とあり其文にいへらく右記する所八古今の言をやハらけまた古今の意をうけ先輩に聞る處および自から試みし事臆説といへども記し侍りぬ是養生の大意なり養生に志あらん人八著す所の頤生輯要を考へ見へしこゝに其要を取る也と云り巻尾附録あり杉本義篤撰通篇男女の交念を慎しむへきよしを志るす第四巻慎色慾を擴る意ふるへし此本文化十年頼惟完か七言律詩一首をはしめにのす是八篤信百年忌辰に當て藩主重臣に命して其墓を祭らしむ惟完よつてその事を附せし也著書多しといへども此書尤蒼生の助とふるよし詩中に見へたり○義篤石見の人賢を業とす

古今養性録十五巻 十五冊寫　　竹中通庵

巻首東華春齋序および野宜卿より通庵に復する書一篇をのす次に元禄四年辛未高元泰序同年山田巽後序同年竹厚序同年自序あり凡例十二則引用書目引用諸家姓名及篇目あり　第一巻　修養總論篇　第二巻　四時修養篇平旦　夕篇　第三巻　居處篇衣服篇　第四巻　食麋篇　第五巻　飲酒篇飲茶篇　第六巻　飲食禁忌篇　第七巻　情志篇　第八巻　道引篇　第九巻　修養諸術篇　第十巻　急救諸術篇

第十一巻　婦人篇　第十二巻　小児篇　十三巻　孳疾篇　第十四巻　呪由篇　第十五巻　鍼灸篇　門を分ち古人の言を證として長生無病の術を述ふ漢文ふり或ハ圖をあらハせしものあり元禄五年上木

古今養生鍼十五巻十五冊刻　同

同物なり

老人養草五巻五冊刻　香月則真

正徳六年丙申北村可昌及同年坂口法眼春水字章父時年九十一か序ありすへて者達を保養する心得を志るし諸書を引みな假字もてかけり世俗に曉し易きを要とす巻尾に藥法なと志るし又小引を附す同年京師に刻す貝原か諸訓に伯仲して蒼生に深切の書ふり

婦人ことふき草三巻六冊刻　同

坂部彌堅序及元禄五年壬申自から述る所の例言あり婦人嗣子を求むるの術より姙娠十月のうちの保養産後百日迄の接養の事西土の書を引耳聞を加へ志るす此書もと中津侯の旅宿にて人の需に應して書たるものなれハ脱漏も有べしといへり上中下各二巻とふす

いなこ草一巻一冊刻　稲生正治

元禄三年男宣義か刻序及伊藤野丈と志るせる序あり婦人胎養の術を述文体鄙俗ふり胎教　保養　臨産　産後　治療　祈禱　通論の七等に分ち志るせり

及幼鈔一巻一冊寫　近藤達

巻末を按するに天和三年癸亥仲春達その主の命を奉して嬰兒の保傅撫育の術を諺言に譯し臆記する處を鈔出するよしをいふ凡受胎の月より婦人身持心得の事にはしめ初生撫育の手當痘疹療藥の法にいたるまてを志るせり

小兒養生鍼三巻一冊刻　千村直之

小兒衛保の術をのへし俗文の記ふり尤深切といふへし元禄六年戊辰自序

同己巳題後あり上巻胎教中巻初誕下巻保傳

大和本草十六巻同諸品圖一巻九冊刻　貝原篤信

寶永五年戊子門人鶴原韜序同年自序目錄凡例ありこの本同六年の上木にして圖一巻は正德五年乙未の上木ふり自序を按るに不佞自ゝ幼多病好讀ニ本草一有ニ志於物理之學一也尚矣嘗以ニ講餘之日一粗纂錄ニ於本艸之要言一且於ニ群籍之中一采ニ輯於本艸所一不ゝ載之品物一復据ニ摭於本邦所一有而本草與ニ群書所一不ゝ收錯雜而記載焉間加以ニ舊聞與ニ聽見一彼是相敷演凡向千三百六十餘種分門折類釐爲ニ十有六巻一云々和品三百五十八種蠻種二十九種は本草及群書に載せさる所此書初て載る所のよし目錄の末に記せり第一巻八本草の書を論し第二巻八藥用を論し第三巻より品物に及へり諸書に考へ自說を附し和名能毒を記せる尤詳ふる書ふり

本草製譜二巻二冊寫　井上玄載

享保八年自序例言ありすへて藥品をいろは分にして其製法を志るす

本草和名二巻二冊刻　深江輔仁

是秘府中に藏むる所官醫丹波元閑多紀安長是を勝錄し本草爾雅說文玉篇和名類聚醫心方等の書によつて校訂して刻せしものふり上邊に考訂する所を細書す

本草紀聞十五巻八冊寫　小野蘭山

寛政二年辛亥十二月三知良序及ひ源九龍か序堤文熙跋引用書目總目又每巻目錄を舉く知良か序に云小野蘭山精を研き本邦中華の書に徵すべきものハ參考せさるふく諸先師の說穩ふらさるハ新考を出し品類名實を正す門人是を記して一編となす傳寫を經て錯雜訛謬頗重にして厭へきあり又省略にして解すへからさるあり近比友人源九龍數本をもつて校讐し頗を刪り略を補ひ一十三部六十二類一十五巻とふすふりすへて片假名を以て志るせり云々○按するに是本恐らくは啓蒙の稾本ふるへし

本草綱目啓蒙四十八巻二十七冊刻　同

蘭山の口授をその門人岡村春益か筆記して孫小野職孝か校閲を加へ上木せしもの享和二年丹波元簡か序文化二年門人源樸か後序あり凡て本草綱目載する所の品物悉く和名及諸國方言を施し品類の形狀本邦異國産する所によつてかわり有ること等片假名もて志るせり各巻目錄をのす

凡一千八百八十二種次第ハ本草綱目に志たがふ

第一巻水○第二巻火○第三巻土○第四巻金玉○第五巻石○第六巻同○第七巻同○第八巻山草○第九巻同○第十巻芳草○第十一巻隰草○第十二巻同○第十三巻毒草○第十四巻蔓草○第十五巻水艸○第十六巻石草○第十七巻苔草雜草○第十八巻麻麥稻○第十九巻穀粟○第二十巻菽豆○第二十一巻造釀○第二十二巻菜辛○第二十三巻柔滑○第二十四巻蔬菜水菜芝栖○第二十五巻五果○第二十六巻山果○第二十七巻夷果○第二十八巻味果○第二十九巻蔬菓○第三十巻香木○第三十一巻喬木○第三十二巻灌木○第三十三巻寓木苞

木○第三十四巻穉木服器○第三十五巻卵生蟲○第三十六巻同○第三十七巻化蟲○第三十八巻濕生蟲○第三十九巻龍蛇○第四十巻魚○第四十一巻介○第四十二巻同○第四十三巻禽○第四十四巻同○第四十五巻同○第四十六巻獸○第四十七巻同○第四十八巻人○享和三年上木

救荒本草二巻 二冊 寫　　同

巻首和板救荒本草の事を論すへて草木の名を標し蘭山の口授を其下に記したるものなり

本草啓蒙名疏五巻 五冊 刻　　小野職孝

蘭山か著せる本草綱目啓蒙中に載する所和漢の名稱を類聚し國字を以て叙て四十七篇に分ちにハかの撿閲に便ぶらしむ文化五年源弘賢か序及凡例六則あり天之部に至て止る

本草補物品目錄三巻 三冊 寫　　後藤光生

本草綱目補物品目錄後編と題す草木鱗介羽蟲土石すへて七門に分ち各門又和國外國を分ちて本草にもれたるものを補へり附錄蜜乙(ミイ)辣一種を載す

本草物品目錄後編三卷三冊寫　同

題して本草綱目補物品目錄後編といふ上におふし卷尾に九百四十七種亥五月中增九百五十八と志るす又附錄一種あり

蘭畹摘芳六卷三冊寫　大槻茂質

蠻產動植及ひ藥品等の圖會にして茂質兼て譯解する處つんて山をなすよりて門人蓮沼清綱師に請て淨書し一編の書とふし六物新志の續編に充つといふ山村昌永校訂寛政四年壬子同人序あり

遠西醫方名物考二十七卷二十七冊刻　守田川榛齋

男守田川榕號榕菴校補西洋の醫術を唱る者の爲にあらはせし書ふりすへて西洋來舶する所の藥品及ひ方劑製煉諸術の名物蠻書を引て委く眞片假字に綴しものなり卷首男榕の凡例あり

採藥錄二卷二冊寫　佐藤一見

天明六年丙午の自跋あり又每卷目錄をかくこの書は一見薩州に採藥せし時著す所にしてその輯錄する所の藥品多くハ薩摩琉球の產ふりその餘近國及ひ唐山朝鮮等のものに及ふといへとも十分の一に居れり

和漢人參考一卷一冊刻　加藤玄順

初編後編及諸品圖附錄追加の五段に分ち和漢人參の事において頗詳悉せりけたし人參考ハ其父謙齋か作る所これに玄順か臆說を加へ漢字を以て改め志るし治痢經驗の後に附すといへり後編ハ皇都西章次か作る所玄順又增加して圖を加ゆ

人參譜五卷三冊寫　田村登

人參凡七十有六種を集め其土產形狀を圖にあらはし其眞僞を辨しまた種養收藏の法をも志るしその詳悉を得さるものハ別に或問に辨して卷後

に附すといふ第一巻真參部十五種○第二巻假參部十一種○第三巻胃參部五種○第四巻俗參部三十六種○第五巻植參之法養參之法收參之法藏參之法擇參之法人參總論次に人參或問一巻を附錄とす元文三年戊午孟春吉瀧以明序寶暦五年乙亥二月勝春調序及元文二年丁巳自序寛保三年癸亥本有美跋あり

朝鮮人參耕作記一巻 一冊 刻　同

朝鮮人參培養の法をしるしたる書にして往々圖畫をあらはせり延享五年戊辰二月藤立泉か漢字序明和改元甲申二月福山舜調か序寶暦十三年癸未孟春の自序明和改元八月の自跋同年田村善之か跋あり

人參培養法一巻 一冊 寫

この書も同しく培養の法をしるし擇土　作畦　下種　搭棚　堀根　移植　採實　用糞の八條に分ちしるせり又搭棚の條人參園圖をあらはす

朝鮮種人參作方并中製法書付一巻 一冊 寫

培養の法凡十三條末に右作法之致法者野州表にて作立候趣を認とらせ百姓より取寄せ候書面に御座候云々次に中製法七條末に右者人參根焙爐干揚と致候積り云々荒増中製仕法書面之通御座候としるす其さま書上の体ふり

花彙四巻同後編四巻 八冊 刻　田充房

寶暦九年己卯駐景舎主人序および自跋あり毎巻目錄をかゝく草木の藥品に入るべきものを圖にあらはし其略をしるす前編は草後編は木をあつむ後編には小野職博か引あり

怡顔齋介品二巻 一冊 刻　松岡成章

体載櫻品梅品等に介虫をあつめ蟹、蝦、蛤、螺、龜鼈、雜の六類に分ち記す凡藥食の宜惡器財の用否等此書に就て審擇せはまた益すくなからさるよしをいふ巻末圖をあらはす元文五年庚申冬の自叙寶暦八年戊寅夏六月

男典か序あり同年上木

鯨志一巻 一刻 一冊　　山瀬春政

寶暦九年己卯季春戸田齋か序同八年戊寅季秋自序同十年庚辰秋龍元周か鯨解今井田立成か跋及ひ例言三則あり齋か序に云其書たるを顧るにはしめに諸家の舊說を引てもつて名實を正し中頃そのみつから見聞する所の効用をあけて以て藥餌に便し終りに圖說を具へてもつて品類を分つと云々

番外雜書解題巻之九終

番外雜書解題巻之十

戸田氏德編輯

訓戒

童蒙先習十五巻 二刻 二冊　　小瀬道春

慶長十七年壬子孟夏初吉河陽後學求得か漢字の跋ありまた巻首に總目をかゝく童子の訓誡とふるへき事をあつめたる書にして清少納言枕草紙にならひ何らのもの　と題して鄙近の訓辭を類聚せりたゝへは見たきものは我身の惡ほらのたつものハ將棊の助言さいへるこゝさし西土の書にていはく雜纂のたくひふれと教戒をむねとすれはかの書にもまさるへきにや

清水物語二巻 二刻 二冊　　坂上韋林庵

清水まうての老人に託して問答の体に書たる教誡の書ふり儒道と佛道の事を辨して浮屠氏の世に害ある事をのへたり巻首にいふ文章のよきをこのむ人ハ三史文選道を志らんと願はゝ四書五經和歌は源氏事のおもしろき

には昔より忘るしおきたる諸子百家の事佛經ふゞ引合せたる多し今この物語ハ一つのこゝろさす所有と見るへし志す所の外はいつれもいにしへの草紙におとれるふらんといふ其主意佛教を破るにあり此本寛永十五年戊寅開板ふり○按するにこの本作者をあらはさす兩部神道口決鈔に容膝記といへる書を引ていへらく後陽成院の御宇に坂上韋林庵といふ大儒あり兩部神道の事をかれけるに主上御感心のあまりあまつさへ大内神道の稱號を下し給ふ後洛東祇園のひつしさるに草菴をむすび蟄居して清水物語を作りてます〳〵佛教を破す云々これにて韋林菴の作たるを忘れり

貝原家訓一卷 一冊 刻　　貝原篤信

假字の家訓なりその目　聖學須勤　幼兒須教　士業勿怠等凡二十餘條を忘るせり貞享元年甲子八月と忘るすこの本寛政癸丑赤松勳か刻する所勳か漢字の序あり勳字は大業といふ

大和俗訓八卷 五冊 刻　　同

これまた戒とふるへき事を假字もて忘るす　爲學　心術　衣服　言語　躬行　應接の六類にわかてり寶永四年丁亥門人竹田定直か序寶永五年戊子立冬自序あり翌年上木○自序にいはく漢字を忘らさる人の爲にいさゝかむかし聞る所のことはりを今の俗語をもつて書集む世の中夫婦のおろかふるもあつかり忘らしめ兒女のいとけなくて菽麥をわきまへさるをもさゝさんとこひねかふのみ云々

童子訓五卷 五冊 刻　　同

是また小兒輩の教とふるへき事を聞へ易く忘るせり自序にこのいましめを作る故をつらぬ

五常訓四卷 五冊 刻　　同

五常の德をあけて其体用訓義を聖賢の遺言に考ふ初卷は總論をのす寶永七年庚寅冬至日定直か序目あり八年上木

樂訓三卷 三冊 刻　　同

およそ人は天然自得の樂をそこなはす平生愉々の心をいたくへき事を喻せしものにてその大略人心天地にうけ得たる大和の元氣あり是人の生る理ふり草木の發生してやまざるごとくつねにわが心の内に天機のいきてやはらきよろこべるいきほひのやまざるものありこれを名つけて樂といふといへり總論

節度　讀書　後論の四篇に分つまた圖畫を出す寶永八年辛卯孟春

書肆柳枝軒茨木信清上木の跋あり

家道訓六卷三冊刻　同

用財　總論の二類に分つ假字にて一家の主たるものゝ戒めを記す又正德二年壬辰孟陬柳枝軒の跋あり

文武訓三卷三冊刻　同

また假字にて文武兩道の要旨をきこえ易く点する享保元年竹田定直同志の許に得て京師に上木する所ふり上卷中卷文訓　下卷武訓にして各その首に定直か序を載たり

初學訓五卷五冊刻　同

また假字にて人倫の道を細に辨す享保三年戊戌五月定直か序あり同年上木

望海錄九卷三冊刻　野間三竹

漢土の書籍より世のいましめともなるへきことはをぬき出して集錄す四卷より以下宋儒の書にいへるもの多し皆出所の書名を舉く寛治元年讀耕林子序あり

不亡鈔四卷四冊寫　室鳩巣

此書も人の教訓ごふるへき事を雜紀す學問之事より追服の事に至る二十四條に分てり不亡の名老子死而不亡にこれるよし自序に見へたり

不忘鈔四卷四冊寫　同

前ごおふし

駿臺翁遺訓一卷一冊寫　同

子弟の爲に學問の心得をかたりしにかたはら門人ふさの筆記せしものとみやされは体裁定らす字訓ふさ首に記せしものあり末に延寶二年京中の町數　宗旨　人數　男女數　銀兩算差　又攝州天王寺伽藍修覆の時日本國中寺々より寄進を命せらるゝの員數等を記すものありこれかつて所藏せし人の合て訂裝せしふるへし

名古屋　玄醫

丹水家訓二巻二刻冊

門人吉村恂益注解を附す漢文にて訓誡を記せり元祿六年癸亥下村玄壽叙同年廣澤元矩序および同年恂益か跋あり玄壽元矩ハ共に玄醫か門人ふり

以佐免草二巻二刻冊

寶永三年孟夏の自序に霖雨の淋しき砌机に向ひ聖賢の金言佳句をあつめて自身藏さし又は子孫の惡ふるを諫んかために編りしと云々すへて和漢の故事ふさましへ假名もて教さふるへき事を記す

幼悟家書五巻五刻冊

日比正甫

貞享三年丙寅自序ありいふ少年より學に志すこいへとも善師ふく藏書ふけれハ其道にいたる事能はすたゝ日ころ朋友と切磋する處の論説を記しおけるものを一二抄出して子弟に志めすといふ片假字もて記せり　第一巻德行類　窮理類　陰德類此巻多く西土の故事を引徵せり　第二巻辨惑論　第三巻同　第四巻順逆論　第五巻又辨惑論とす尾に警戒を附す

讀書戒　名利戒　旅心戒　自反戒　慎獨戒皆和歌を附す元祿五年上木

和事俗談正誤考三巻三冊寫

元祿十三年庚午秋八月序あり序中に伊東氏左近將監童蒙に示すの書あり其語難く其言簡にして昧暗之眼讀かたきにより改めて讀み易くせしものゝよし伊東氏今卿貴を詳にせすこの書すへて利口便佞を寸智の人とほむる誤ふさこの類童蒙婦女の教にふるへき事

を若干あつむ次に遺編神明御託宣之篇と題し諸神の託宣をあつむ

輔儲編四巻四冊刻　宇佐美　惠

雲州世子の侍講たりし時撰する所すへて唐土歴代賢臣輔導に益あるものを輯録せし書ふり明和三年丙戌秋自序同年冬故完跋あり

金峨長語三巻三冊寫　井上　金峨

題して金峨山人病間長語といふ一時の隨筆といへども多くは世のたとへ人のいましめとふたへき事を志るせり

病間長語三巻三冊寫　同

前と同書なり

古今武家童子訓五巻五冊刻　神田　勝久

いにしへ戰場の勇士長將年齡幼弱をもて戰功をあらはせしもの〻事蹟を假字に志るし童子のいましめとふしかつ武を講する便りにす自序あり此書全部十巻にして是はすなはち前編ふり後編未た梓行せさるよし書坊の言に見也安永三年十一月上木

至公訓四巻四冊刻　瀧川昌樂序ありこの書は毛利侯家臣多田何某に祿五百石の折紙をあたへられしに不興氣にてふけ返しけるを既に成敗せられんとせられしか家人井澤某か異見によりて隱居ありし前侯にこの事をとひまいらす此時前侯井澤に弓矢の心得武家政事人民撫育のさま〳〵をかたりかへりて二千石多田にあたへよと申されしこの本はすふはち井澤に告誡ありし所を筆録せしものふり享保十七年上木

明君家訓二巻二冊刻　井澤　節

京師の書舗茨城柳枝軒梓す書背の小辭に此書はたま〳〵市中に得る所にして何れのとしいつれの君侯の撰ふるを志らすおもふにかならす近世德位兼有し文武並備れる賢主のその臣庶に勉勉せしむるの訓詞にして典謨訓誥君臣等誡戒して共に至道にすゝむの事備れるよしをいへり案るに寫本

のはしめにたま〳〵西山公御撰のよし志るせしものありされと桃源遺事に
もその目ふく後人の附會と見えたり向坂咬雪軒か老士語録にいふ近年
井澤と申もの〻書に明君家訓と申て上下二巻御座候世俗將軍様御自
作の書の様に申或は譽或は誹りその評まち〳〵にして當時專ら時花申
候私ハ御上作とは不奉存候井澤か書に武士訓と申書御座候此文とひと
しく相見申候全く井澤か自作と奉存候この書日本の弓矢と漢土の弓
矢と相交り一質に覺つゝりたる書に御座候日本正道の弓矢に對して大に
無禮至極ふる書に御座候云々

鷹の山文一巻 寫一冊

上杉治憲朝臣

分つて三篇とふす　第一篇老かゝろ　第二篇桃のわか葉　第三篇八題
ふしみふ婦人および男子の教訓とふるへき事を記しおきたる書にして篇こ
とに奥書ありてその來由を志るす○第一篇右文化六年三姫君御婚姻に
付三月十五日米藩御發途の節大殿様より被進候御書寫篇第二篇右
治憲公於貞様江御餞別に被爲進候御書ふり○第三篇此前世子顧弟
子公御奥より御表江被爲移し後治憲公より御左右詰之間江被成下し
御書也とありその藩臣の寫しおける時の奥書ふるへし

つら〳〵ふみ二巻 刻二冊

細井德民

人の問によりて君臣の道を書つらねたる書にして上巻を君の巻下巻を臣の
巻と名つく全編書翰の文もて志るせり享和元年八月樺島公禮漢字の序
あり

女訓抄三巻 刻三冊

目序あれとも名をあけす女の教訓を志るす○第一四道八苦の事○第二五
志やう三志やうの事○第三けいしをかへり見る事○第四庶衆のふちの事○
第五志んたいを治むへき事○第六主君に事へき事○第七友にましはるへき
事○第八藝能あるへき事○第九後家のふるまいの事○第十後生前生の
事すへて佛教を主として說をたつ

四民睫之鏡一巻一冊寫

荒陽散人著とあり鄉貫詳らかならず士農工商おの〳〵すきはひをつとめ行ひをはげむべきよしいましめたる書ふり

源　類紀

招隱館漫筆三巻三冊寫

十一篇にわかち故事ふと引て世のたとへ人のいましめとなるべき事を志るす

假名文ふり

茗話二巻一冊寫

和漢にかゝはらず世のをしへとなるべき説話を隨筆せり

釋　師蠻

本朝高僧傳七十五巻三十二冊刻

元祿十五年壬午三月の自序ありいふ元亨年中東福寺沙門虎關釋書三十巻を著すといへども僧員五百にみたず尚遺漏多きを以てあまねく採輯し

て當時にいたるまで一千六百六十二人を得たりといふ蒐輯極て廣く尤大業といふへし凡例十則援引書目並に總目をあく古傳に從て十科に分ち志るせり就中安覺法師と婆羅門僧正の傳はことに心を盡せしよし凡例に見ゆ

釋　日政

本朝法華傳三巻三冊刻

類宗凡九十餘傳みな僧史の中より采錄せしものふり十科に分つ○發願轉讀　持誦　講讃　書寫　神感　聖應　聽聞　雜緣　流傳　庚子九月と記せる自序あり庚子ハ萬治三年ふるへし

一休和尚年譜二巻二冊刻

一休名は宗純或は狂雲子と號す後小松院應永元年甲戌正月朔日生れ後花園院文明十三年辛丑十一月廿一日八十八才にして逝す一休一代の事蹟を年月日にかけて記せり寛文九年上木

鈴木　正三

二人ひくに二巻二冊刻

寛文四年甲辰の板本ふり下野の住人須田彌兵衛が妻に託し夫の討死せし事にもとつきたる因果物かたりふり七人ひくにこいへる書名を慕ひてかく名つけしものと見へたり

鐵牛禪師七會語錄十五卷附自牧摘稿十五卷十八冊刻

七會語錄十五卷は鐵牛が言語を記錄せしものふり○首一卷開卷に鐵牛畫像および自題次に清人張玉が康熙己未序陳廷敬同年の序法叔戒文が康熙辛酉序天和三年癸亥釋南源序貞享二年乙丑高泉序清の康熙己未牧山序天和癸亥悅山の序目錄等を載す○第一卷より第三卷にいたる鐵牛紫雲山瑞聖寺に住せし時の語錄なり○第四卷第五卷武州牛頭山弘福寺に住せし時の語錄ふり○第六卷駿州福壽山□林寺に住せし時より奥州雨足山大年寺洛西葉室山淨住寺總州補陀洛山福聚寺等に住せし時までの語錄ふり○第七卷　小參　行由○第八卷　源流　頌古　拈古○第九卷　機緣　聯燈○第十卷　法語○第十一卷　問辯

小佛事○第十二卷　小佛事○第十三卷第十四卷　薦偈○第十五卷　贊

末に清康熙丙寅揭爾跋同年揚正跋貞享三年丙寅慈岳定琛跋あり此編はすべて門人元成智興元脉が編輯する所にして元祿十三年の上木

鐵牛禪師自牧摘稿十五卷八門人福□元成の輯錄にして皆鐵牛が詩文ふり元祿七年甲戌高泉序同十三年庚辰千呆同八年乙亥自序あり自牧八鐵牛の別號ふり○第一卷　古體　排律　七言律○第二卷　七言律○第三卷　五言律　七言絶○第四卷より第七卷にいたる　七言絶○第八卷　七言絶　四五六絶○第九卷　記○第十卷　記○第十一卷　銘　題　文　瑞聖龜鑑　長興警策　淨住家訓　弘福遺訓○第十二卷　序　跋　引○第十三卷第十四卷　跋　書問○第十五卷　書問　啓　疏　聯　元祿八年乙亥悅山同十三年庚辰月潭跋あり亦此年上木

願海紀行一巻 一冊刻　釋水月

自序あり其略に元禄壬午の歳信州善光寺慶雲上人佛駕に侍し來て東奥白川にいたる水月たま〳〵この如來を拜し六八の本就を評唱し題額の下において一章を如來に献す又その韻を和して上人に贈る殆百篇ゝ云々今夫を集録して上木せしものゝふり

出定後語二巻 二冊刻　富永仲基

延享元年八月の自序あり漢字にて釋氏の事を論したる隨筆ふり○文會雜記云四教義集解の標旨抄といふものにて釋氏大意ハ知るゝ那中行の説なり出定後語も大抵是より見出したる樣ふり出定後語はめつらしき書ふりゝ中行も評判ふりゝ原田温夫いへり云々

佛國暦象編五巻 五冊刻　釋圓通

文化七年庚午沙彌智較か序および自序沙門恵岳か跋あり巻首摠目をかく　暦原　天體　地形　暦法　眼智の五門に分ち佛家の暦術を論したる書ふり

須彌山儀銘並序和解二巻 二冊刻　同

巻起に云須彌ゝハ天竺の語にして正しくハ蘇迷盧ゝいふ支那に譯して妙高ゝいふゝれ世界の中心に卓立する所の山の名ふりゝこの世界の成立ゝ壞滅ゝの相は釋尊一代大小の經藏において是を説給ふ事甚詳ふりゝいへゝも須彌界四天下等の相は神道を得たる人にあらされハこれを見る事能ハす人類の至る事あたはゝる處にして諸天神仙の境ふる故にはふはた廣大にして狹小の情に應せすゝを以て外學の士たま〳〵佛經を閲する人ありゝいへゝも印度の教に三明六神通の法ある事を忘らすゝ云々又佛國の象數を論説したる書ふり

番外雜書解題卷之十終

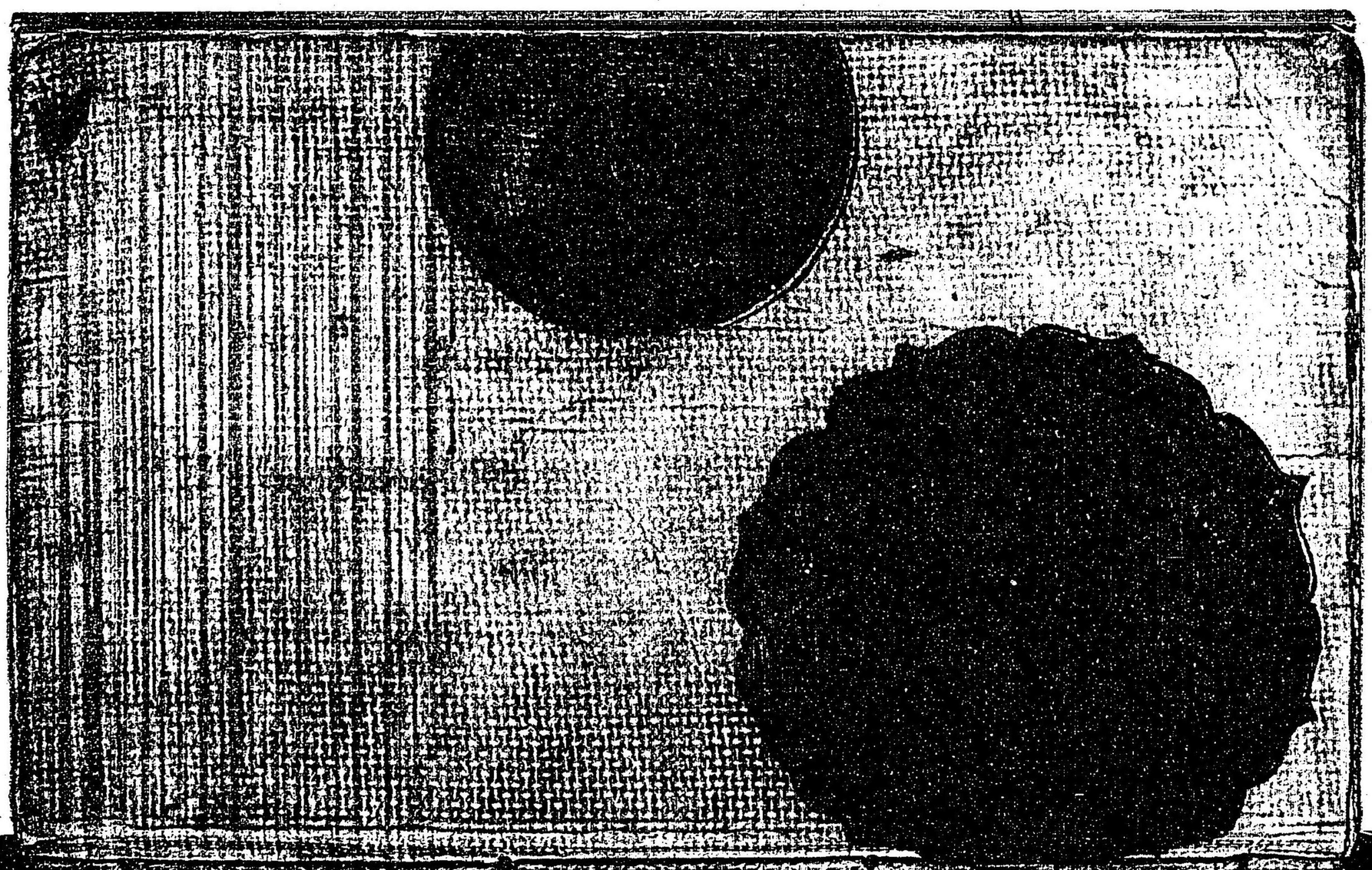
69
50b

明治二十六年十月廿八日印刷
明治二十六年十月卅一日發行

定價金貳拾錢

版權所有

編集者　近藤瓶城　東京市小石川區指ヶ谷町七番地

發行兼印刷者　近藤圭造　東京市麹町區飯田町五丁目二十六番地

發行所　近藤活版所　東京市麹町區飯田町五丁目二十六番地